嘉永六年意見　三條亞相公　忠能

五　同上に付德大寺公純申渡　嘉永六年十二月

六年十二月近來度々異國船渡來有之殊には當年浦賀長崎等ゟ入津書翰差出乞通商候右者事に寄御國體に拘り候儀有之間敷とも難申不容易趣先達而關東より申來候儀も有之達　叡聞候尤關東には防禦警戒を被盡候へとも夷情難測候得者　宸襟甚不安被　思召候右に付社々御祈被仰出不汚神州不損人民樣との　叡願致爲在候右異船此後渡來候共平穩之應接には可有之候得共自然彼より兵端を開候儀も難量彼是深被惱　叡慮候卽今別條有之儀には無之候得共右之時體一同被相心得候樣可示含關白殿被命候旨於御拜道廊下兩役列座權大納言被申渡候仍申入候也

別段明年依有　思召和歌御會も無　御沙汰　御願有之　神社御法樂被爲在候旨无急度同卿被示候也

十二月廿八日　公純

六　同上に付久我建通申渡　嘉永六年十一・十二月

亞墨利加合衆國より差出候書翰之儀に付夫々被致建議候趣各遂熟覽集議參考之上達　御聽候處說異同者有之候得共詰り和戰之二字に歸宿致し候然る處而々被致建議候通當時近海を初防禦未御全備に不相成候に付渠申立候書翰之通彌來年致渡來候共御聞屆之有無者不申聞可成丈此方よりは平穩に爲取計可申候得共彼より及亂妨候義有之間敷共難申其節に到不覺悟有之ゟ者御國辱にも相成候儀に付防禦筋實用之御備精々心掛而々忠憤を忍ひ義勇を蓄え彼之動靜を致熟察萬一彼より兵端を相開き候はゝ一同奮發毫髮も　御國體を不汚樣上下擧ゟ心力を盡し忠勤可相勵旨被　仰出

候十一月

別紙之旨於關東沙汰之趣無急度申來候間心得に被爲見候旨權大納言被示候尤平生懷國恩可磨忠魂時に候得共無心得違樣宜番々御申傳可給候乍御面働明日午刻迄に可返給候也

但昨日被示候和歌御會も無御沙汰旨月次之二字及漏脫候に付更に宜申入旨被示候也

十二月廿九日　　建通

七　非常立退心得

立退心得」原朱爲見出し紙端に認有之

寅七年三月二十日花山院家ゟ過日領分付方書付可出被示差出候處今日此一紙被送上山田村へ丸印差出了　家領取調子

細は當時所々にて炮術習練稽古每々有之に付自然あやまち火散亂非常の大事に相成候義も難計然時者遠所へ　御立退可被爲在哉其期に到候へは諸臣供奉勿論候へ共家内向も御跡より御方角へしたかひ可然由彼是厚御憐愍の義殿下垂命候其時に到候へは一同糧米も被充候に付其家々高割を以人數被定百石に付十五人之割右員數之外幷老年或病者等供奉無之輩者領所々々ゟ立退可然且家來始また者等は其主人於領所扶助可致遣義左候得者其領内にゟ暮方出來候村を勘考内定可然事

前條巨細之義者追々便宜可申入候右に付去日御指出有之候一紙返進候間被内定候村ゟ印被附候樣致度候事

右議奏沙汰にゟ堂上一同へ被内示由也花山家へは橋本前大納言示告云々

上分九　諸大夫三　侍二

士五　下八　女八

八　和歌 三首

阿那可畏千島乃蝦夷賀萬爲天來豆我大君邇射牟加波牟止波

伊智志呂岐神乃御稜威乎也賀豆又唐能奴邇思飛知勢牟

太力加多那弓矢八阿禮止日本能神乃伊吹爾志久物曾奈幾

○

七年二月分月次御會被見合每月　神宮　石清水社　加茂下上社　內侍所等御法樂被　仰出御會始　七夕　重陽　二月水無瀨宮聖廟　六月聖廟等は是迄之通被爲在候事

七年四月六日午剋　內裏炎上

九　老中牧野備前守廻狀

牧野備前守樣被成御渡候御書付御廻狀之寫

大目付へ

此度渡來之亞墨利加船內海致退船候然る處右滯泊中彼是自儘之所業等も有之候分意外之兵端相開候義も難計候に付夫々御固被　仰出候へ共船軍之御備向もいまた御整に不相成候折柄無餘儀平穩之御處置に被成置彼方志願之內漂民撫恤幷航海往來之砌薪水食料石炭船中闕乏之品々被下度との義御聞屆に相成候所場所御取極無之候得は何國之浦方へ勝手に渡來不取締に付豆州下田湊松前之箱館において被下候積に候當今不容易御時節に候間兼ゆ被仰出も有之通質素儉約相守此上水陸之軍事一際相勵もし非常之義も有之候者速に本邦之御武威相立候樣可被心掛候

右之通早々可被相觸候

寅四月

一〇 合衆國使節ペリー條約寫

七年合衆國依請免許云々是吾國海防未行屆合國頗暴烈之間爲恐嚇許之由也國辱之甚先代未聞之事也關東進止實如無人可歎々々

日本國へ合衆國よりの使節提督ヘルリと日本大君全權林大學頭井戸對馬守伊澤美作守都築駿河守鵜殿民部少輔竹内清太郎松崎滿太郎兩國政府爲取極置く條約附錄

第一ヶ條

一下田鎭臺支配所の境を定めんが爲關所を設るは其定め儘たるへし然れとも亞墨利加人も亦既に約契し日本里數七里の境關所出入するに障あることなし但日本法度に悖る者あらは番兵是を捕へ其船に送るべし

第二ヶ條

一此港に來る商船鯨漁船の爲上陸三ヶ所定置き其一は下田其一は柿崎其一は港内の中央にある小島の東南に當る澤邊に設くべし合衆國の人民必日本官吏に對し叮嚀を盡すべし

第三ヶ條

一上陸の亞墨利加人免許を請すして武家町家に一切立寄へからす但寺院市店見物は勝手たるへし

下田條約原本爲見出紙端に認あり

第四ヶ條

一徘徊の者休息所は追ゆ其爲旅店設るまて下田了仙寺柿崎玉泉寺二ヶ所を定置へし

第五ヶ條

一柿崎玉泉寺境内に亞墨利加人埋葬所を設け麁略ある事なし

第六ヶ條

一神奈川にての條約箱館において石炭を得へきとあれと其地にて渡し難き趣は提督へルリ承諾いたし箱館にて石炭用意に及さる樣その政府に告へし

第七ヶ條

一向後兩國政府におゐて公顯の示告に蘭語譯司居合さる時の外は漢文譯書を取用ゆる事なし

第八ヶ條

一港取締役人一人港内案内者三人定置へし

第九ヶ條

一市店の品を撰むに買主の名と品と價とを記し御用所へ送り其價は日本にゐ官吏に辨し品は官吏より渡すへし

第十ヶ條

一鳥獸游獵は都て日本において禁する所なれは亞墨利加人も亦此制度に伏すへし

第十一ヶ條

一此度箱館の境日本里數五里を定置き其地にて治法は此條約第一ヶ條に記す處の規則に倣ふへし

第十二ヶ條

一神奈川にゐの條約取極の書翰を差越し是に答ふるには日本君主に於て誰に委任あるも意の儘たるへし

第十三ヶ條

一玆に取極置所の規定は何事によらす若神奈川にて條約に違ふ事あるとも亦是を變する事なし

右條約附錄エケレス語日本語に取認め名判致し是を蘭語に翻譯して其書面合衆國と日本全權双方取替すもの也

曆數千八百五十四年第六月十八日
日本嘉永七年五月廿二日下田に於て名判す

林　大學頭 花押
井戸對馬守 同
伊澤美作守 同
都築駿河守 同
鵜殿民部少輔 同
松崎滿太郎 同
森山榮之助

貴官の命を奉して

一一　老中阿部伊勢守門に題する詩

一題老中阿部伊勢守之門云 壬七月上旬寫

一世棟梁名望虛折膝羊犬意安舒莫言海内同其族輸得滿清林則徐珍膳餐
犬羊醜顏切情和一時延喘息後禍果如何
主客全殊地我勞彼逸遊方憐治世極穩平誤王侯怖戰阻人氣憐和蹈禍機神
公若靈在試問是邪非倉皇屈膝拜夷蠻苟且何如釀後患恨殺滿朝林立士一
人無復北椒山

北椒山北條相州之號歟

一二　異船渡來之風評數ケ條 安政元年九月以降

○嘉永七　九月　日月闗東申來イキリスもアメリカの如く長崎と箱館
にて許すと云々

言語道斷也

嘉永七年九月十八日朝大坂湊天保山北沖廿丁餘ヲロシヤ舟一艘乘入 軍船にて

も無之歟　同夕酉剋天保山ゟ十四五丁手寄安治川四丁目へ小舟二艘にて廿八人計乗込直に上荷船十艘計にゟ差留候へとも留兼候處追々上荷船三四十艘取卷川上へ不上留止候尤兩奉行諸役人も走付居候故陸へ上候異人へ子細尋候へとも一言不通願書樣の物を奉行へ差出候夫も一向難分由異人は唯頭を地につけ禮節致し大指を差出し候言語不分數剋に及候處上陸の七八人落涙致し何分船へ返し呉候樣との仕方ゆへ先元船へ返し天保山へ諸役人藏屋敷留主居同勢引連陣取騷々敷事に御坐候右船にかなにておろしや國と記し有之候よし舟長さ三十五間巾十間餘と申事に候子細は一向不分候（土屋相模守大坂城代家來大久保マ、と申人當時の一人にて直に元船へ乗入見分候由賞美云々）

右

又説　附武士用人見分ゟ説右小舟にて四丁目迄來書翰筥を差出候へとも落手難致差返し候處異人はしきりに差置度樣子與力同心共漸々舟にて元舟へ送り返し書筥も返し欲歸處元舟の中より大に御苦勞と日本言葉にて一言申候よし也又船に建候文字漢字のよしかなにてはなきよし也

九月廿三日尼崎沖へ又二艘乗込由也眞僞如何泉州海岸異船入津先平穩ゟ趣には候得共別紙ゟ通從明日差替被　仰出請取兩人晝夜五人宛可有勤番且不滿五人ゟ節者裏番へ加番可相催但公卿兩人必可有參勤候事　近習ゟ輩遠方他行不可有之候事

右條被　仰出候由廣橋前大納言被申渡候也

九月廿一日　公純

口上覺　一昨十八日魯西亞船一艘大坂近海へ渡來候得共先平穩ゟ趣武邊ゟ申來候必不物騷樣可申入置旨關白樣被命候此段可申入由

兩傳被申付候尤御相番樣方へも御傳達可被成候以上

九月廿日　兩傳奏　雜掌

頃日異船飄著攝泉之邊事實未辨進退雖穩去　皇都不遠因茲四海無異變醜類速退散天下泰平國家靜寧萬民平穩御祈一七箇日之間可抽精誠被　仰下候事

九月廿三日　長順

追申到著次第御祈始之事　滿座翌日卷數獻上之事

御祈抽丹誠之事雖勿論於今度者來近海事實不容易之間猶以可凝懇祈之事

大坂近海へ異國船乘入候段土屋采女正より申越候彼地者異國應接之地に無之何事も分兼候間長崎下田兩港之内へ相越可申旨申諭しいつれにも早々退帆致候樣大坂町奉行へ申渡候樣采女正へ申遣候旨年寄共より申越候此段爲御心得申進候事

九月

一三　大坂より來狀　安政元年九月

嘉永元寅

一八條へ十月八日巳剋大坂より十九日便扨昨日申上候異船昨夕ゟ彌天保山十丁計西に碇をおろし小舟十計持參安治川へ唐人追々上り候不殘召取に相成夜前は御城代樣幷御屋敷中夜通ねいらす御心配被成候事に御座候

一淀様三田様高槻様尼崎様明石様大和路御大名衆不殘猩々緋陣羽織著し
尤馬上にゟ川口天保山濱邊に御陣取被成候石火矢大筒仕掛置嚴重に手
當扨々見事成事に御座候尚又堺筋は馬上之人夥敷通行致大亂に御座候
一大坂渡海舟不殘御差止に相成猶又鐵炮かたけ通行心あしき事に御さ候
尤大坂へ唐舟入來候事は昔々無之事と申候今朝異舟見申候大さ京二條
御城位御さ候丸て御城同様にて白き帆廿四五掛け御座候船黑く御坐候
一金相場七十目餘に相成候
一米は昨十八日夕々嚴敷御觸にて今朝々三四匁計下落仕候
九月十九日

一四　京都風聞書　安政元年九月

廿日京都巳剋風聞書寫

〔掃部頭は不被出張偽説也〕
一今日八ッ時彦根様大佛へ御著御固之由竹田口膳所様御固西の方丹波大
名御固の由
一大坂安治川へ小舟にゟ參候異人共御召取之上日本傳馬舟にのせ本船へ
御歸しに相成よし
一紀州様は殊の外物入九十九浦有之皆御固め有之元來此御國之要害さへ
能候はゝ泉攝迄は不來筈之由大き成物にて大きに御迷惑なり
一紀州加田沖異舟通行之砌千石舟を大分出しとめ候へとも一向不構千石
舟共押通千石舟は沈まん耳の由紀州大に不覺を取候との沙汰紀國にて
は大に秘し居候由
一天保山を築立候時の奉行夫となく臺場を兼てこしらへ候心取と也深き
智略とて歸府後御側に召上と也
一當春長崎へ來候魯西亞とは別の舟の由
一能勢妙見山へ參候ても一向異舟は不見夜分固の火計みゆると也
一廿二日紀州々鯨舟三艘押切堺浦へ注進熊野浦沖合に異舟十五六艘見へ

候由

此流星京都に見て多坊城家葉室家内辨に也十月十八日薩州經由屋久島見る本年積り京都へ敷申候由之談云薩州に於て十五日夕方大なる大きく見し夕方

寅九月十五日夕方西南に落星有之其跡ウハバミの形ち凡三丈餘白雲歟顯申候其形白に光あり口を開き白氣を吹出ス形也其白氣者光はなし如何と申居候處十六日夜紀州日高前ゟ湯淺前へ異船參り候趣大城へ飛脚到來藏元ゟ十七日未明金子千五百兩差立候由十七日七ツ時前御城代土屋采女正殿ゟ一番物見二騎初夜頃二番物見出明方前少し堺へ人數操出し石津邊陣場に成十八日八ツ頃町奉行天保山へ場所見立に出馬と申事にゟ安治川筋夫々人數出し騒申候全白氣爲知かと金相場も一匁餘十八日には引上け申候米價は二匁餘引上申候

十八日夕方近邊ゟ鯊釣に參候者歸り候故相尋候へは晝過八時前黑き船にて帆柱三本に帆を上け一艘入來り天保山ゟ西少し南一里半程向ゟ著船帆をおろし申候釣船ゟ内七八艘見物に參候へとも我々は參不申候沖釣に參居候者は居なから致見物候由扨其夜は上荷物は不殘役舟にとられ川口御役所前ゟ安治川木津川尻無川都ゟ提灯にて船ゟ往來難出來程ゟ由今日者觀音廻りにて清水寺舞臺にゟ遠目鏡持參見物人大賑合のよし

一十八日七ツ頃安治川四丁目へ小船二艘（黑船白船）一八人宛乘上陸いたし候美濃紙半分程の書附持參與力請取元船へ歸る同夜寅剋御城代一番手人數繰出し十九日明七時二番手繰出夜明三番手繰出す町奉行は安治川四丁目出張元船へ上船ゟ積りにて御城代公用人大久保要と申人尾形幸葬と申蘭學の醫師召連參候處中々上船爲致不申無利に上る積致候へとも後には劍突鐵炮差出候由無據歸り被申由又元船ゟヲロシヤ國と片かなにゟ小幟建置候由人ゟ丈は常體ゟ少し大髪はざん切少し色赤し足は十三四の童子ならて無之由差出候書付讀人なし夫ゟ異人に逢候ても言語不通乍去日本人多く居候由にて異人者通し候ても表向故不通候樣子のよ

し十八日申刻觸十九日朝町觸有之近海へ異船參り候趣に候へとも全體
此津立遠淺にて大船可入海にゟ無之又艀等にて沖合砂先ゟ留船候とも
上陸は不致候樣夫々手當申付候間小供女供へも能々申諭候樣又いろい
ろ演說不致樣火の元入念常體致商賣候樣夫に付諸色直揚不致樣にと申
趣意之御觸也　市中何となく淋しく生玉高津社内遠目鏡にゟ群集致候
今日は淀郡山小泉出張郡山は一岡新田本陣淀は天保山へ陣取候本陣は
いつれか未知紀州三千人と申事にゟ木津川固め木津願仙寺本陣に成道
頓堀大分下宿致居候道頓堀は芝居不殘休之處中芝居初日十九日出筈に
候へとも其儘不出西横堀淨瑠理小供芝居影繪抔は一日も不休興行致候
今日は金相場六十九匁八分觸に候へとも七十一匁五分迄之商ひ申居候
上へ恐れ七十目之内に書上申候

廿一日東町奉行所へ參り樣子承り候處十八日安治川四丁目へ上陸之節
西町奉行之兩手をにぎり候由夫ゟ書付出し候處與力請取明日之事と奉
行被申候へは承知々々と皆日本之言語也艸書書之樣子之由十九日與力
を元船へ掛合に遣し候處座敷體之所へ入れ外ゟ錠おろし候由與力も驚
候趣何か掛合歸候廿日又々其與力參候筈之處風烈にて得參不申廿一日
には大方可參と申出候夫ゟ手前も天保山へ陣見舞に參り樣子も一見可
致と出かけ申候安治川筋大賑合南北之堤見物人にて押合候程之事也併
安治川四丁目にて役人詰居一通にては通し不申候又天保山入口板橋に
て又々役方大勢にて通し不申候手前は兼其積りにて罷通場所へ參候處
元船は傳法之沖天保山ゟ五十町程沖にて大棚と唱候場所日本之大船荷
積下し候節かゝり候場所也最七八町近寄候は棚有之淺く相成所究竟之
場所立かゝり居申候日本の船路能案内存知之者水先致居候と相見船大
きさ凡五十間巾三十間も有之樣に見請申候其邊を上荷船にて取卷居申
候又幟立替おろしや國と文字替り候よし天保山は御城代初米倉丹波守

其外諸藏屋敷不殘陣取申候サツマ細川阿波立派に候其外未陣屋普請に
て大混雜天保山殘る場所無之北向にも四五ヶ所陣取申候大筒も陣に大
分有之御城代陣中に居候内バッテイラと唱候由小舟を元船ゟおろし候
とて大混雜に付濱へ出一見候へは七八間も有之革製ゟ由小船に五六人
乘黃色の帆三本卷揚申候片より柱あつて三方は何もなき樣に相見候前
後中と帆卷へ中大前後に夫を日本ゟ上荷船十二艘にて取卷候へとも其
間をぬけ出候故上荷船八十挺櫓にて押切候へとも木津川口にて頓と乘
おくれ異舟は堺湊へ入申跡より上荷船追々參連れ歸候よし夫迄は見不
申候誠に矢をつく如く走り申候内々承候へは元船へ參り被乘候趣候へ
とも後難を恐れ私は參り不申候元船へ乘一見致候者に相尋候へは大筒
前後左右に廿八挺つゝ都合五十六挺筒長さ五六間も有之樣に見請候由
咄候又元船中三重にして日本人を乘込せ候處は外ゟ一重計也

天保山御固ゟ義は軍法も定て可有之候へとも素人了簡にては日本ゟ大
筒は元船迄はとゝき不申異船ゟ筒は天保山迄可打程に長筒萬一ゟ時天
保山へ一二挺打込候は中に被居申間敷何ても隨見山いばら住吉邊に大
筒を伏せつゝ引入れ不申候ては筒間に合不申頓と合點行不申候事に御
座候何か願ゟ筋有之樣に噂致候へとも下々にては頓と不分御城代も廿
二日夕方公用人藤田勇と申人六日切にて江戸へ出立

一舟見物に參候者は乘船致し氷砂糖抔もらい候者間々有之由
美人一人見請候者有之よし
一高取人數二百人餘竹林寺本陣ゟ由淀川筋も山崎は龜山公御固ゟ由
一去廿七日異舟へ呑水を御遣し被遊候四斗樽百挺上荷にゟ運ひ候
一此元六條新田へ夜ゟ内に大根を盜に上候由其足跡の小き事日本の子供

の如くきひすと覺しきもの無之よし

一御城代ゟ昨日異舟へ被下物

一にんしん大きな茶舟に　一艘
一あひる但をん計り　一艘
一鷄但をん計り　一艘
一かも瓜　一艘
一大根　一艘
一みかん　一艘
一かふら　一艘
一柿　一艘
一鯛　六百枚

右之通昨三日朝積出し候處同早朝沖の方へ帆を上候ゟ兵庫沖へ乘出し

夫より紀淡の間を通り退舟致候由に御坐候

一天保山其外海岸御固御堅固に其儘陣拂なし

十月四日

此程異人四人計死去致候由申候

此間夜尾の魚舟へ取付肴くれと申候に付漁師立掛り異人叩き上け申候由何れも劔鐵炮所持致居候とも日本人五六人も乘組有舟には手を出し不申候よし

右十月四日廣橋家へ大坂ゟ申來候よし

一五　長崎より萬國へ海上里數

江戸板一枚摺丑八月廿八日寫

大日本長崎より萬國海上里數

唐南京へ　二百三十里
琉球國へ　二百五十里
朝鮮國へ　百七十里
東京へ　千三百里餘
南天竺へ　二千二百里
ジャガタラへ三千二百里
バタン國へ　二千五百里
阿蘭陀本國へ一萬二千九百里
ノヲバ新阿蘭陀へ四千二百里
イキリスへ　一萬千五百里
ナンバン國へ九千一里
カフリ國へ　七千里
キリシタンへ一萬里餘

南北アメリカ國へ　五千里

此二ケ國日本より東南にあたる

蘭船圖略之

帆　數本
蒸氣　一本
車左右　二
小舟　一

長サ四十五間水車丸サ六間ナンバン鐵　巾十五間　石火矢　二挺
帆柱　四本　大筒　三十六挺　帆數　十五張
七萬五百斤積　人數三百人のり　黑素　十八人乘　ケムダし　二丈九尺丸サ
なんは鐵

一六　海陸御固役人

一 豆州相州武州上總下總房州海陸御固御役人附

浦賀御奉行	二千石高	戸田采女正
同 御助力	十萬石	松平誠丸
同 大津	十七萬石	井伊掃部頭
三浦三崎	三十五萬石	大久保加賀守
相州三ヶ所下田出張十一萬三千百廿石		
下田	五萬石	水野出羽守
相州御臺場大筒方	八百石	田村四郎兵衛
武州金澤	一萬三千石	米倉丹波守（後カ）
同 本牧	五十四萬石	細川越中守
大森海岸	三十六萬石	松平大膳大夫
本牧	三萬五千石	細川能登守
芝高輪	十五萬石	酒井雅樂頭

御殿山	三十二萬石	松平越前守
濱御殿	十二萬石	松平讃岐守
鐵炮洲佃島	二十五萬石	松平阿波守
深川洲崎	十一萬九千石餘	立花左近將監
木更津富津天神山	二十三萬石	松平肥後守
洲ノ崎	十萬石	松平下總守
同 海岸	二萬二千石	酒井安藝守
同	一萬石	稻葉兵部少輔
同	一萬五千石	水野壹岐守
同	一萬石	林播磨守
同	三萬石	黑田豐前守
同	二萬七千石	松平備中守
下總寒川	十一萬石	堀田備中守

同　濱ノ村　一萬石　森川出羽守
外海上　總勝浦　二萬三千石　大岡兵庫頭
同　一ノ宮　一萬三千石　加納備中守
下　總銚子　八萬二千石　松平右京亮

御用掛　江川太郎左衛門
御代官　齋藤嘉兵衛
竹垣三右衛門
林部善太左衛門

惣御人數合三十九萬六千餘人

石火矢　六十挺　大筒　六百挺　長柄　一萬三千筋
車臺附大筒　三百挺　鐵炮　六千五百挺　ノソト　百二十本

同二枚「繼板

阿蘭陀本國へ　一萬九百里　イキリスへ　一萬五千五百里
ナンハンへ　八千里　カノリ國へ　五千里
南北アメリカへ　三千里　シヤカタラへ　二千百里
南天竺へ　三千二百里　バタン國へ　二千五十里
東京へ　千八百里　琉球へ　三百五十里
唐南京へ　三百二十里　朝鮮へ　二百五十里

アメリカ蒸氣船之圖

略之　長六十間　船中　卅五間
帆柱　三本　帆數　七張
石火矢　二挺　大筒　四十六挺
黑素　卅二人　水車四輛尺口十間
大舟　一　小舟　二

豆州相州武州上總下總房州海陸御固御役人附

先一丁板と頗有相違不知何是依繁多略茲

惣人數四十七萬九千五百餘人云々

一七　長崎風聞書

嘉永六年八月

――七月中頃より長さきへおろしや船四そう參り壹岐守樣俄に御出も御さ候てたん〳〵御家來も長崎へ被遣候　嘉永六年

右九月三日出平戸ゟ候文

嘉永六

先月十七日ヲロシヤ舟四艘當地湊へ入津仕候處本船五六十間計乘組人數四百五十人餘二番舟四十間計乘組百人餘三番舟二十八九間乘組五十人餘四番舟十二三間乘組十四五人惣人數七百人計にゑ罷在何歟心願ゝ筋有之趣にゑ書翰差出候に付從公邊御取揚に相成早急飛脚を以江戸へ御注進有之候處江戸ゟは御目付衆御下向ゝ由當九月御交代ゝ御奉行樣にも道中御急にて當月下旬頃迄ゝ内御著ゝ由扨又右異船入津にては兼ゑ嚴重に御觸出ゝ通九州九ケ國長門對馬等へも國許へ人數揃置さつと申節は一同軍勢繰出候樣被　仰渡候事に候先當節第一番乘大村公二番に島原公三番筑前公平戸公各方平常ゝ御供廻に十倍增にゑ御繰出し實に海陸共に市をなし候然處右四艘ゝ内一艘火輪舟と申小舟車を仕掛石炭を以火を燃し火勢に應して風を取海上飛鳥の如く相走候由既に先月廿四五日頃申出候には私とも最早三ケ年も本國に歸り不申候に付此節國王ゝ安否如何と存候間伺として差遣段公邊へ願上候處歸帆可致候て四艘とも一同に可罷歸旨被　仰渡候へは本國迄往反十四日目には立歸候間暫くゝ間御猶豫被　仰付度申逃直樣出帆仕候由同廿六七日頃又々舟中粮米其外小入用差支ゝ品有之

に付急に相求申度候に付今一艘本國へ立歸申度段願出候處御聞濟之上出帆殘り二艘之大舟在留仕居申候將又先月廿六日夜二更頃ゟ五更頃迄之内海陸共に都合六度程色々化物出來り諸人を相惱し候よし其中に取分て諸公方御飾り付之御坐船何も紫之幔幕或者布幕五色幕打廻し弓鐵炮鑓長刀之類嚴重に飾付さと云は打取んとの思召諸士晝夜手くすね引て相構ける所に大津の車牛の樣なもの數十疋先に立大勢のヲロシヤ人具足を著し或は惣髪又は坊主もあり色々に姿を替何も拔身鎗長刀又は突劍を持打立掛り候景色に候御座舟之面々打捨んと存刀を拔んとしても一向不拔鑓を取んとしても手足自由にならす惣身しひれ相惱み力に及かたし餘り苦敷粉れ何となく舟々一同に聲を上唯ワア〳〵引〳〵引〳〵呼はりける計也寄手の化物は一同に鯨波を上只ヤア〳〵〳〵と陣鐘大鼓にゟ責立候景色にゟ誠に〳〵恐敷事共なり全くヲロシヤ人邪宗門の法を以妖怪を行ひ候と風聞致候且又皆舟々に狐狸を數十疋飼居候由にゟ多分は狐狸の業にも有やらんとの事市中評判區々也當鎮代にも不容易御心痛被爲成候趣にて於當社天下泰平御武運長久國家靜謐臨時御祈禱相務候處不思議と其妖怪當月一日之夜迄にて消失致候由右に付ては全く御神德相顯退散仕候はんと舟々は勿論市中共一統安穩致候趣粗承申候夫に付舟々ゟも御祈禱之御禮御守等頂戴に罷出者數不知候扨々珍敷事也當節諸公樣御繰出人數凡二十萬人計と申事に御座候尤當時江戸御伺中之御下知相濟候迄は諸公方皆々御國許へ一先御引取に相成乍併家來之向々は皆御番所其外數十ヶ所之御臺場飾付當地之臺場は高木作左衞門殿幷御鐵炮方臺場又は町年寄藥師寺宇左衞門にゟ相構へ夜に入ては萬燈にゟ賑敷寔古今稀なる珍事にて申上度事筆紙盡しかたく荒々取縮相認候尙又追々後便申上候御熟覽後此書中御燒失可被下候

八月七日認　夜分は蠟燭一萬斤つゝ燒候由に候社司ゟ丑秋來文也

右長崎

一八　加州錢屋五兵衛本宅有合品物　嘉永六年八月

加州石川郡宮腰浦錢屋五兵衛と申者昨子年中被召捕吟味之處羽州秋田奥州弘前松前口出店有之手代何れも三四十人つゝ地元にゐ抱入年來異國交易を專致候事故相顯候五兵衛義八十歳餘に相成舊臘牢死致候由同人當時貯物之義本宅取調有之候處左之通出店之義は未御取調無之有之候品相知不申候

加州本宅有合

一大判九十九枚入　三十箱　一二千六百六十六枚　小判
一三萬六千六百兩　古金　一九萬千三百三十兩　二歩金
一十六萬五千三百廿兩　二朱金　一十五萬六千五百兩　一歩銀
一壹石貳斗小玉銀　但目方二千百八十三貫目　一七十八貫五百廿兩　加州札紙目方
一千百六十貫文　四文錢　一廿七萬五千三百兩　用立金
一三萬五千四百石　有米　一五千四百石　大豆
一五千三百石　小豆　一五千三百樽　燈油
一八萬五千三百石　持高　一□鹽藏　一ヶ所
一唐物藏　一ヶ所　一土藏　七十八
一諸道具　數不知　一二千五百石船　四艘
一千五百石船　六艘　一千石船　六艘
一八百石船　二艘　一五百石船　十三艘
〆三十三艘

本人五兵衛悴喜太郎二男八之丞三男由藏右之者御調相濟候迄加州樣御參府無之三ヶ國御巡見と申事に願立當八月中御參府之由日々御評定所大廣間御出座にて專交易御取調有之候

丑八月

右丑八月借石井家寫之

一九　松平越中守申立書　嘉永六年八月十三日

太平打續武事衰弱の時に候間此度亞墨利加國ゟ要求一切御斷被成候はゝ忽ち兵端を開爭戰に及ひ國家ゟ安危存亡に拘り候に付御許容ゟ容易に究難き事否難被遊事は勿論に候得共今度持參ゟ國書等頗威刧に相見へ候神武帝開國以來夷狄ゟ凌辱未曾受蒙候義無之既に弘安ゟ頃蒙古入寇ゟ時北條時宗陪臣ゟ分として兵力を以て其鋒を擊挫き我　神州保固し其威萬國迄も相輝候陪臣時宗と引比へ候得は甚以憚入奉存候得共到大到極ゟ御職掌被爲當候事に候得は御國耻を被爲忘御國體をも被爲失通商通信御許容ゟ筋被對御職掌決して有之間敷哉と奉存候得共萬一苟且ゟ思慮に陷り國家安全さへ有之候得は權時ゟ宜候間一先夷賊ゟ意に適し通商交易迄も望ゟ儘に被任一旦ゟ患を緩して其内には武備相整國内充實ゟ時に到り通商御停止被成交易場も御取戻し可然なと申儀も出來可申哉如何にも老練遠慮に相聞可申候得共其實は天下ゟ大事を誤ゟ極にて始終永安ゟ見込有之事には有之間敷一旦通商を許し無事平穩ゟ御取扱に相成候ゟは人々目前ゟ安を偸み游惰衰弱に流れ何程に世話御坐候ても通商御停止交易御取戻しの義は決して相叶申間敷候乍去夫は兎も角も通商御制禁ゟ儀は建國以來ゟ御國法九州大名初今に到り右ゟ御國法急度相守能在太平無事ゟ内にも夫々海備應身相用候義にて近年猶又度々海邊手當筋ゟ儀御沙汰有之外夷に被對御國職不相失御主意度々被仰出も有之處亞墨利加恐嚇ゟ文言により御職掌ゟ實難相立天下後世如何相議候はん無此上御恥辱實以恐入候殊更御國法を被爲枉亞墨利加通商御許容ゟ趣に候はゝ魯西亞譜尼利亞を始西洋諸蕃默々罷在候儀は曾て有之間敷候且今度ゟ異船渡來ゟ根元譜尼利亞等ゟ素より同氣類ゟ國にて俱に申合其指授を得能越候事も難計左候はゝ此度諸蕃各難題ヶ間敷申越候事不可知是を拒み候はゝ兵端を長し其意に從候はゝ種々凌辱を受國力盡果可申且又交易場を御聞屆に候はゝ

彼も商館を取立可申左候はゝ諸蕃入込來號令不行屆清國之大邦にても其害不少況や日本之狹隘諸蕃御引受可被成地所も不相見乃至御引受に相成候ゟも彼是御障筋出來候儀顯然之義に付日本地方へ御受之交易は誠に拙策之至に候夫等之處過量仕候得は一旦之御許容永世大患之基と相成中々一日御安心之場は決ゟ有之間敷且御國法を被爲守交易筋御斷に相成候はゝ定て兵船差向兩國戰鬪に及可申兩海諸島にも侵奪之儀も可有之候得共兵端彼ゟ開候義に御坐候間所謂無名之師にて直在我と申もの故他日恢復之功も易得候然は一旦御許容の上にて它日兵力を以て御取戻相成候はゝ曲在我之筋合にて必勝之期有之間敷且戰は危事生民之死生社稷之存亡に係り候事にて不容易義は勿論之儀に候得共是には御下知仕置何程も可有之人事を被極盡候上は天命之然らしむる所此時宜に至りて恐なから是迄之御厄運不及是非一筋に御決斷之外無餘義候彼書中劫制之意を含み表には兩國和平之意押立候樣相聞候には曾て不及事に付隨分御答方も彼書面に被應御咄向被成可然候付ゟは先年魯西亞幷其餘通信交易相望候所ヶ樣〳〵と御答被及候處今更其國へ新に通信交易致候はゝ魯西亞其他外國へ被爲對御信義不相立素より時勢之變革有之義には候へとも數百年之祖法御改革に相成候段是又御本意不成事に付御斷被及其書中事件之內漂民撫恤之事は申旨により御取扱可有之旨被仰遣方も可然哉此一事此事之振合相違相成且此後數々渡來可致事にて御手數に相成候共是等之儀は御緩め被成候共却て樣子を探り知り彼に所長船艦火攻之術を奪ひ戰所用に相成候一助に可有之右御書取之趣により愚見御達申候宜敷御取計可被下候猶又今度浦賀表にて書簡請取之儀全く一時之權道之趣餘儀も無御坐候乍去長崎表は外國御引請之御場所富津は江府第一之御要害之儀天下一同相心得罷在候事に付今度浦賀表にて國書御請取富津內海へ乘入測量自由に致候て御差構無之是は爲天下に疑惑を生し且海外諸蕃へ相聞へ候處如何有之候哉過去候事には候へとも御思慮を被加益緩々御示置御坐候樣奉望候

事に御座候

嘉永六丑年八月十三日　松平越中守

二〇　水戸齊昭不可和十ケ條

安政元年正月

水戸齊昭卿不可和十條　水戸前中納言齊昭卿撰

示閣老之文

一朝鮮征伐慶長寛永之切支丹御禁絶等之明斷武威海外に振ひ居候然處此度渡來之亞墨利加夷御制禁を心得なから浦賀へ乘入り和睦合圖之白旗を差出推て願書を奉り剩へ內海へ乘込み空砲打鳴し吾儘に測量抔致其驕傲無禮之始末言語道斷にて實に開闢以來之國辱とも可申候城下之盟は國之耻と承候處右之通御制禁を犯し大城程近き內海へ乘込み我を刧し我を要し候夷賊御退治無之而已ならす萬一願之通御聞濟に相成候樣にゐ者乍憚　御國體に於て相濟申間敷是決ゐ不可和之一ケ條候也

一切支丹宗之儀者御當家御法度之第一に相成居國々末々に迄高札建置候處夫にゐさへ御住置に相成邪教の毒夢にも御油斷不相成候況や亞墨利加を新に御近付に相成候はゝ何程御制禁有之候ゐも右宗門自然再起之勢必然之義乍憚祖宗之神靈へ被爲對御申譯無之決ゐ不可和之二ケ條也

一我金銀銅鐵等有用之品を以彼羅絨硝子等無用之品に換候義大害有之ゐ小益なく候和蘭之交易さへ御停止にて可然時勢に候都ゐ蘭阿陀之外に又々無用之交易御開に相成候はゝ神國之大害此上者有間敷是決ゐ不可和之三ケ條也

一ヲロシヤ　エンケリヤ等先年より交易を望候へ共御許容無之候處亞墨利加夷へ御許容被遊萬一魯西亞英吉利等より願上候へは何を以御斷可被遊候哉決ゐ不可和之四ケ條也

一夷國人は元來惡心無之交易さへ御許容有之得は何等之子細無之抔と世間噂候へとも初は交易を以て因を求め終には邪教を弘め又は種々之難題申懸候義彼等か國風にゐ有之遠くは寛永以前邪宗門之患近くは清國鴉片烟之亂前車之覆轍に候是決して不可和之五ヶ條也

一萬國之形勢往古とは漸々相違いたし候得共我　神國のみ鎖國之趣意を守り大海中に孤立致し候義始終無覺束候間矢張外國と往來致し廣く交易之道を通候方可然抔と云說蘭學者流之者窃に唱る候哉に候へ共　神國之武心固結武備充足中古以前之國勢には回復致し候はゝ外國よりも押渡り恩儀を弘め候事に相成可申候とも當時太平遊惰之風俗外國より僅に數雙之戰艦渡來候ゐさへ人心恐怖致し彼に要せられ交易始候樣にゐは外國に渡り遠略を施し候事抔無覺束候左候へは交易之道を開く之法眞に席上之空論とも可申歟是決して不可和之六ヶ條也

一彦根若松等へ守衛被　仰付既に此度抔は會津家來共炎天を犯し七八十里の遠路晝夜兼行馳付候由大名達に人數繰り出候義も相聞へ奇特之事に候趣夷賊内海へ乘入り我儘に測量等致し候ても打拂之義不相成諸國之士民空敷奔命にのみつかれ候樣人々解體可有之是決して不可和之七ヶ條也

一長崎海防黑田鍋島へ被　仰付候義清國阿蘭陀等のみの手當にて無之惣て外夷の御手當に可有之候處浦賀近海にゐ外夷交易之願書御受取相成候樣にては間道之往來を御許故兩家無用之御關所番に被　仰付置候姿に相當り兩家之氣請如何に可有之候哉是決して不可和之八ヶ條也

一此度夷賊之振舞眼前一見致し候得は匹夫にゐも心外に存斯迄無禮之夷賊御打拂も不被遊候上は御臺場之御備等何に御入用可有之哉と内々相歎候者も有之由實地にて夷賊驕傲之振舞を見候てはいかさま右樣に可存筈なり小民なからも御國恩に沐浴いたし候故實に賴母敷次第無智之匹夫さへ右樣相歎き御打拂之義御決定に不相成候餘り寛宥仁柔之御所

置のみにては下には御思召は不分候故奸民共御威光を不恐異心を出し候も難計是決して不可和之九ケ條也

一夷賊打拂之義者祖宗之御定諭誡に文政之度審に被仰出候義に候得者御思召は固より大平打續武備御備り兼候處容易に夷賊之氣を傲らせ候はゝ其禍ひ難計兵及相接し不得止事和睦之御取結に相成候樣にゐは益御威光を損候故先々當節は枉て御忍ひ夷賊之氣を御ゆるめ置其内專武備御世話被爲在追々御手當御全備之上彌舊法之通嚴重に被仰出候ゐ可然と申も尤之論に候へ共當時宴安姑息之人情朝暮御勵し被成候ゐさへ必死之人氣に相成兼候況や上より武事御示し不被成候はゝ幾年を歴ても諸家之武備相整候義無覺束候既寛政蝦夷騒動により御武備御世話御坐候得共御行屆に不相成候又去寅年打拂御猶豫被仰出畢竟外夷之氣を御寛め其内武備御整之御趣意と相見候へとも十二ケ年之間諸家之武備格別に行屆候共不被存此度夷賊渡來には狼狽致し夷船滯泊中少々本氣に相成候者も有之候へとも出帆に付平日之通心得候樣被仰出候へは一統又々無事に安し俄に相集候武器も直樣散失致候との風説假令は椽の下に火之廻り候とも不心付火防之手當も忘れ居候も同樣之姿實に淺間敷士風に候也廟堂にて聊も和議之御含有之候へは日々御觸に相成候ゐも人氣引立不申從ゐ臺場其外之手當も皆文具にて軍用に適し申間敷候也今日にも彌打拂之方に御決定被成候へは天下士氣十倍致し武備は不令して相整候義影響より速に可有之左候へは征夷之御大任にも被爲叶諸國一統武家之名目にも相當り可申候是決して不可和之十條に候也

右肝要之急務且和戰之利害右にゐ粗相盡し候得とも和議に泥候者は防戰を好み不申戰を主として事を好み亂を樂候樣讒言致し候甚敷に到ゐは戰を主としたる者を罰し敵方へ申分致し和議を取結ひ終に滅亡を招候類笑止千萬に候　神國勇武之俗一旦　廟議御一決之上は右樣臆病之聞へも有之間敷候へとも忠言逆耳良藥苦口姑息苟且之人情に溺れ安き

者故兼ゐ御用心可有之一旦御決定之上は始終御動き無之義海防之第一義と被存候以上

右不可和十條

嘉永七甲寅年正月

二一　狂歌・和歌　十九首

日本とまたちやるめろも吹ぬまにあめりか舟は解ていにけり　有功

日本を茶にしてきたか（唐人ナトケ）蒸氣船皆うかされて（タツタ四ハイテ）夜もねられす

浦賀にて名物なれや唐迄も皆もらひ行水のあめりか

異國船ま近くくれは大名は大つゝよりもひゞくしんしやう

またくるとかたひかたきのいこく舟うらかなしみとはなすつゝ先

あんしてかうこつく跡へいこく舟又くる迄は少しおあいた

またくるといわれておいらんきもをけし浦賀いやさよ文の理

とにかくに引付たかるあめりかを先春迄と引のはしけり

此國はまたちやるめろも吹ぬまにあめりか舟はとけていにけり

春くれは又も引付あめりかを神風吹てちやるめろにせよ

さきかけて散てふ物は武士のみちに匂へる花にそありける

水戸齊昭卿　心有人こそしらめ張弓の引なれつへき時そありける

同卿　安部伊勢守（老中）へ具足に添送之

立田川にしきをそむる紅葉はもちらすは人のいかてめつらん

狂歌　阿部左衞門尉へ送之

末の世のなまくら武士の今め覺あめりか舟の水戸のよきを

なむさんほう江戸はめくらとなりにけりけふもおかため明日もおかため

武具馬具や計唐人様ヲツケ　シンキヤト土の下にて猿かい（ナキ）ゝ

武具馬具屋アメリカ様トソツトイ、

唐人か來ても日本つゝ（筒）かなし　今の武士皆うち（内）死と覺悟なし

ぼろの出ぬ先にいこく洗はりほといてみれはうらかやくたい（大變イ）
具足より利足にこまるよの中はすねあてとこか御手あてもなし

中山忠能履歴資料　卷四　自安政元年　至同五年

一　長崎來朝唐人書上　安政元年七月

當時唐國騒亂之次第申上候樣御尋之趣承知仕候右は道光三十年之頃より烈敷相成廣西廣東無頼之賊黨相集り供秀全揚秀清と申兩人之者張本にゐ同類次第に相增脅從之者も不少或は二三千人又は四五百人（萬カ）も諸所ゐ手を分て亂妨に及ひ剩官府ゐ打入城郭をも奪取り大砲地雷火等を相用ひ隨分軍略にも達候者も多勢語合候趣に御座候右之者共何れも惣髪に相成頭に赤木綿を卷居候故官軍にゐは紅巾賊または長髪の賊と相唱申候昨丑二三月頃江南の内揚州鎮江南京三ヶ所別て賊勢多く四五萬人も相集三ヶ所共城郭を奪ひ取其地之官員討死不少追々隣縣諸所より軍兵操出し京都より
は欽差大臣下向にゐ十月頃に到り揚州は速に恢復致し賊徒何れも鎮江南

京ゟ逃集り堅く相守居候を官軍取圍兩所通路不相成樣斷切罷在申候右南京は明大祖建都地にゟ至て要害宜敷多分急には落城致す間敷哉勿論火炮等にゟ麼に致し候得者速に退治可仕候得共賊兵之内に良民（民百姓一本）脅從之者も不少玉石不分義を心に□忍唯緩攻にゟ粮道を斷切自然と降參いたし候樣欽差大臣之謀略之由に御座候右に付此節唐國出帆之頃迄者勝敗相分不申候將又右洪揚之兩賊兼ゟ木偶人を拵へ天德皇帝と唱へ至て尊敬致し軍兵之進退右木偶人を祈り其示現に隨ひ決斷いたし候由畢竟妖術にも可有御座哉然る處昨五月頃俄に風雨雷鳴烈しく右之木偶人雷之爲に擊碎いたし夫より洪秀全天德帝と僞稱いたし候由に御座候此外別に一種之賊小刀會と唱へ福建之者之由兼て良民體に身を扮し活業之爲に世間を遍歷し合圖次第一所に相集り忽徒黨却奪（同心一本）いたし候由右之示合は銘々小刀を隱し持居何方にゟ出會候とも右小刀を以て割符といたし申候尤城地を屠り州邑を割據致し候者は無之唯々財寶を奪ひ得候得は直に何方となく離散いたし申候嘉慶道光の頃より此種類諸所に在之追々流布仕候趣承及候處近頃は餘程多勢に相成既に昨八月上海縣ゟ三千人程も打入官庫を刼し縣令も被討候趣且同所ゟ滯在仕居候イキリス人ゟ馴合候哉にも承申候乍去是又官軍多勢押寄候間多分今般は退治仕候半と奉存候右之外湖南湖北武昌九江福建等之内諸所（物騷しく本）續々一揆徒黨蜂起いたし諸民之難義不一方歎息千萬奉存候尤北京近邊にも一兩度廣西賊徒之内罷越候得者滿州奉之官軍に被追討敗北仕候趣に御座候猶此後如何成行可申哉何れも懸念罷在候右當時蘇州邊にゟ專ら取沙汰仕候風說に御座候御尋にゟ此段申上候

寅閏七月

王民（江星船主一本）　餘句含一本

十二家揚少棠

右嘉永甲寅於長崎當節來朝の唐人より書上和解差上申候以上

寅七月十一日

二　老中阿部伊勢守より大目付等への達書

安政元年七月

阿部伊勢守殿御渡

大船製造に付ゐは異國船に不紛樣日本□船□者白地日の丸幟相用候樣被仰出候且又　公儀御船之儀者白紺布交之吹貫帆中程へ相立帆之儀白地黑に被　仰付候條諸家においても白帆は不相用遠方にゐも見分候帆銘々勝手次第相用可被申候尤帆印幷其家之船印をも兼ゐ書出候樣可被致候右大船之儀者平常廻米其外運漕に相用候儀勝手に候得共出來之上は乘組人數幷海路乘筋運漕方等猶取調可被相伺候

七月　　大目付ゐ

寅七月廿二日

内海御臺場三ヶ所之分出來候に付布衣以上之御役人見置候儀相願候分者勝手次第相越不苦候日限等之儀者松平河内守岩瀨修理ゐ承合候樣可致候此段向々ゐ早々可被相達候事

七月　　大目付筒井肥前守

七月廿四日

海岸防禦筋幷異國人應接之御用是迄之通學問所御用御免　御勘定吟味役岡田利喜次郎

海岸防禦筋之御用幷御臺場御普請大筒鑄立其外御船製造之御用可相勤候

同日　　御軍制御改正掛ゐ

公儀御軍制之儀前々より之御法式も有之候得とも當今之時勢古來之御備立にゐ者不都合之儀も可有之御取捨之上御改正有之可然被思召候依之御實備之所御大切之儀に付此度夫々掛被　仰付候事故得と御勘考之上御申

分御見込被仰立永世之御規則御定可被成候樣との御沙汰之事

右之通水戸前中納言殿被相達候間追々被仰立候儀も可有之に付爲心得相達候事

水戸前中納言殿へは當月五日於御座間御達し相成候

御軍制御改正掛ゟ

小十人頭執　善右衛門

小普請奥田主馬支配　福島傳之助

御軍制御改正被仰出候に付是迄之御備立其外等相尋候儀も可有之旨相達置候事

大目付井戸石見守

筒井肥前守

御軍制御改正被仰出候間右御用可相勤候

御勘定奉行

松平河内守

川路左衛門尉

御目付鵜殿民部少輔

一色邦之輔

岩瀨修理

三　大阪座摩神社務より異人渡來の書翰　安政元年九月廿一日

御狀被下難有拜見仕候秋冷之砌御座候得共先以御安康被爲成御座珍重之御儀奉存候然者當地へ異國船入込候段御聞被達候由如仰當湊天保山ゟ一里餘沖へ壹艘參居候尤此度之異船は兵船とは相見へ不申天保山ゟ十四五丁程此地へ安治川四丁目と申所迄小船に廿八人のり急に乘込候夫故上荷

船十艘計にゟ留め候得共留兼候所追々上荷船三四十艘も致急に取卷川上には上け不申四丁目にゟ小船留り候所尤兩奉行所諸役人も走付居候故陸へ上り候異國人を何故の事か段々相尋候得共何分一言も不相分先願書樣の書付を奉行へ差出し候丈けにゟ夫も一向不相分由然る處異國人唯地に頭を付禮致計にゟ言葉不分數剋に及候處陸に上り候七八人の異國人大に涙を流し何分船へ返し呉といふよふな仕方ゆへ先元船へ返し候夫ゟ日夜不分た天保山へ諸役人は勿論藏屋敷留守居等同勢引連陣取致騷々敷事共に御座候右異國船にかな文字にゟおろしや國と記し有よしに御さ候船の長さ三十五間巾十間餘と申事に候子細に何故に參り候哉頓と不相分候追々後便に可申上候決ゟ兵船にゟ者無之候由也又風説に京迄も參るなと丶申候得共一向左樣の勢は無之候尚追々可申上候當廿一二日神事祭禮にゟ一向取紛居候故荒々奉申上候前後亂文亂筆之段別ゟ御用捨奉希上候先右申上度早々如斯御座候恐惶謹言

九月廿一日

大江三河守樣

大坂座摩社務渡邊近江守

四　河内道明寺よりの書翰

安政元年十一月四日　河内道明寺

安政元十一四一筆啓上仕候向寒之節御座候處御上々樣方益御機嫌能被爲遊御座奉恐悦候將亦貴所樣彌御安泰珍重奉存候然者今朝五ツ時過ゟ不存寄當地大地震にゟ和上樣始め皆々樣方にも大に被遊御驚乍去山内には別條無御座候間先つ御安心可被成下候其御地者如何

御宮樣奉始　上々樣方にも無御別條御機嫌能被爲在候哉折角御案し被申上候に付一應御樣子御伺申上候先者右之段取急き變事御伺貴所樣迄從拙者共宜可得貴意旨被　仰付如斯御座候御序之剋可然御沙汰可被下候恐惶

謹言

十一月四日

三之室内
辻　官　治
三根恒三郎
三根文治

中山様御内
大口甲斐守様

五　南都よりの書翰　安政元年十一月七日

以手紙得御意候然者去四日辰下剋ゟ不存寄當所大地震夜分毎々五日申之剋過又亥之剋過兩度餘程強震動其外小震度々同六日暮時分又強動今七日朝又強動然る處今七日朝御所ゟ相達候其御地も大地震御様子承之則申入候處驚畏被存候御別條不被爲在候哉被相伺度候當所も右之次第にゑ取紛混雜罷在御伺使可被差上處無其儀宜各様迄可得御意被申候如此御座候

十一月七日

南都世福寺
井上雅樂

田中河内介様

六　大坂よりの書翰　二通　安政元年十一月十一日

九日出之御書面十一日到着致候如貴命追々向寒之節相成候候處上々様益御機嫌能被爲遊御座恐悦至極に奉存上候然者去四日大地震定ゑ御驚可被遊併　上々様御別條無御座候段大慶奉恐賀候偖當方も四日ゟ震出し五日未之剋怒浪涌出仕河々橋等打落大舶小船河々ゟ押登り覆沒致候事故死傷之者數千人有之誠以其大變中々以紙筆難盡所謂蒼田變爲海之勢

實可憐之至に御座候乍併拙宅者無恙遁去無事に罷在候間乍憚御安慮可被下候先者御報申上度以愚札早々如斯御座候頓首

十一月十一日

大坂　田中靱負

大口甲斐守様

○

御狀被下難有拜見仕候如貴命向寒之節御座候處彌御安泰可被成御座珍重御儀に奉存候然者此程大地震に付ゐ者御所樣奉始上御上々樣嘸々御驚被爲在候半乍併無御別條候段重々目出度御儀御祝奉申上候爰元强震高浪等御尋被成下別ゐ難有御禮奉申上候高浪には大に驚候得共皆々無事罷在候段乍憚御休意思召可被下候先者御禮旁御答奉申上度如此御座候恐々

十一月十一日　大坂薩摩藏屋敷　大原万右衛門

大口甲斐守様

七　紀州熊野崎内邊震災之通知

安政元年十一月廿七日

紀州熊野汐見崎内　安政元十一月　紀州

一櫛本　家數四百軒之處

一大島　大津浪にて引込　同三百軒之處

貳百五十軒計引込

一橋杭　同五六十軒之處
不殘引込
一古座　同四百軒之處
三百軒計引込
是より
新宮ゟ木の本迄之町
十四五ヶ浦少々ッヽ引込
一木の本　家數四百軒之處
不殘引込
一南尾鷲之事浦　家數千五百軒之處
八郎兵衛之三階藏一ヶ所
殘り外に土藏寺院共不殘
引込死人六歩通り
矢口浦　深賀利浦　勝浦
白浦　三浦
右五ヶ浦不殘引込也
一長島　家數千軒之處百五拾軒
殘り八百五拾軒引込
一錦浦　家數三百軒之處
不殘引込
是より十四ヶ浦不殘引込候
阿曾浦是より伊勢地也
右者十一月五日夜之事
右見分役人より書上け寫尤も熊野地計也
熊野路より若山迄之書上け

未た不承跡ゟ可申上候事

寅霜月廿七日

八　地震の報知　安政元年十一月

安政元寅年十一月

五日津浪にゟ豆州下田表異國滯船ゟ魯西亞貳艘外に亞墨利加三艘右ゟ内亞墨利加者無何船押碎き異人も船も忽に水ゟ下に相成候哉見え不申候由猶又魯西亞は浪を請候事委敷由にゟ津浪高く打來候を浪の方へ方と船を請け居別條無之旨尤下田湊千間と申地崩流尤多人數流死候由右ゟ内四百五十何人と申もの魯西亞船中ゟ傳馬船を數艘出し日本人を助け申候旨右に付異人助け候人數引連下田奉行ゟ直樣差上け同時異人申候に私共右船ゟ紛船底大破に付修覆仕度下田湊ゟ上陸御免相願日本御作法は相背不申旨申上直樣御免に相成船修覆仕候由右に付ゟ者公儀ゟ魯西亞人上下五六百人ゟ三度共御飯被下候由乍然魯西亞人ゟ一度ゟ飯料を上下ゟ分ちなく壹匁三分ッ、ゟ勘定にゟ相納候趣にゟ甚公邊にも御心配ゟ趣尤被下候御料理者一番下ゟ處一汁二菜位ゟ御仕出しゟ趣異人も右に者不存寄儀と申困り居候趣乍然一度壹匁三分勘定にゟ一度に勘定納め申候趣公邊にも御困りゟ由其外に東海道今般地震にゟ破損に付御往來六ケ敷候はゝ我國ゟ大艘を送り候間右に被召御通り被下度抔申上候由にも承り申候魯西亞は亞墨利加とは餘程靜に致居人かしこきあしき國ゟ由何分此節修復最中に承及候

九　下田異國船の風聞書　安政元年十二月

十二月六日夜認

豆州下田表滯船ゟ魯西亞貳艘亞墨利加三艘ゟ處先月四日五日ゟ津浪ゟ砌下田表海岸千間ゟ處流損致し其節魯西亞者貳艘共破損輕亞墨利加者三艘

之内貳艘丸切浪をかふり破損致し人數五百人計溺死之旨然處魯西亞者下田流損之人を傳馬船を出し助け亞墨利加人の流死を見捨置唯日本人を助け候由其後事靜に相成候後一艘殘候亞墨利加人ゟ魯西亞人に應對之風聞墨人ゟ魯人へ今般不計海中地震に付我國之船貳艘流損死人夥敷有之候を貴國者日本人を助け同盟之我國人を助け不吳は何故哉と申强き難題申掛け不足之旨にゟ返答聞度由申掛け候處魯人答に被申越候趣至極尤にも候得共外海之中我等別ゟ出來候儀なれは直樣貴船へ助け船出し候得共此地者日本人所屬之地故斯來滯船中異變有之候ゟ我船別條なければ日本人之難儀を助け候者理之當然之由申答候よし然れとも亞墨利加人一向不承知立腹にゟ議論仕候由然れとも魯西亞は左樣申掛られ候からは望もあらは一戰も可致乍然其國は何故日本之地に入込居候哉此地にさへ滯船無之候はゝケ樣之難變も有間敷抔と申一同苦にも不致候趣乍然此議論等にゟ公邊御役々にゟ强く御心配之由風聞承申候云々

十一月十三日

右二帋借公純卿寫之　安政二正十六

一〇　土州城下及在等の形況書　安政元年十一月

十一月五日

御城下中

一燒失家	土州	千八百七拾六軒
一潰家		五百六十八軒
一半潰		三百九軒
一怪我人		三拾九人
一行衛不知者		四人
一死人	高岡郡	百五人

一流失家　千貳百貳拾軒
一潰家　貳百三拾六軒
一汐入　百四拾九軒
一行衛不知者　八拾五人
一怪我人　貳拾參人
一流死　拾五人

土佐郡

一潰家　四百五拾貳軒
一半潰　五百七拾七軒
一死人　拾人
一燒失家　貳拾軒

吾川郡

一潰家　三拾軒

一半潰　五百貳拾貳軒
一流失家　九拾軒
一死人　六人

長岡郡

一潰家　五拾四軒
一流失家　壹軒
一汐入　六軒
一死人　三人

安喜郡

一潰家　貳百九拾三軒
一半潰　貳百五拾四軒
一流失家　九拾六軒
一波入傷　四拾壹軒

一流死人　貳人
一行衞不知者　拾七人

香我美郡

一流失家　四百五拾六軒
一潰家　百四拾八軒
一半潰　四百六拾軒
一死人　拾八人
一行衞不知者　貳人
一怪我人　七人

幡多郡

一燒失家　百三拾五軒
一流失家　貳百貳拾七軒
一潰家　八百貳拾三軒
一半潰　八百貳拾貳軒
一怪我人　五人
一死人　六拾三人

右之外被損所夥敷

都合
燒失家　貳千百拾五軒
潰家　貳千六百一軒
半潰　貳千四百廿一軒
行衞不知者　百八人
怪我人　七拾七人

覺

寅十二月廿一日寅中剋土佐郡潮江村出火同卯下剋消火覺

一燒失家數　百四拾五軒

内　貳拾四軒　諸奉公人御家老中家來地下宗門に不入分

百貳拾軒　地下人

外に壹軒　潮江村　次郎　ヒニンなり

外に

一部家巳家類四軒　諸奉公人

一土藏二ヶ所　右　同

一部家納家類　貳拾四軒　地下人

一土藏貳ヶ所　右　同

一馬　壹疋　燒死

一死人□□人等無之

一一　東海道地震の形況　安政元年十一月

東海道地震

江戸大名小路兩三軒崩町並者無事に御座候夫より小田原宿まて無事なれ共少々宛者有之箱根兩本陣に町並に崩れ三島宿明神前より半分燒失半分崩れ沼津宿御城不殘燒失町並半分崩れ伊豆下田不殘流失原宿無事よし原半分燒失半分崩れ殘人數不知岩淵不殘崩れ死人數不知蒲原宿少々殘り死人かす不知府中御城石垣共崩れ町並半分燒失半分崩れ死人千貳百人之書上同國清水湊津浪にゑ流失鞠子岡部無事金谷半分崩れ日坂無事掛川不殘燒失死人百六拾人書上見附少々崩れ濱松同斷舞坂半分流失荒井同斷白須賀二川吉田城下少々宛之崩れ御油赤坂藤川岡崎城下無事に候併少々宛之損し候處も有之よし

右之通長州樣御家中守田龜太郎殿手控にゑ書寫し申上候

其外宮宿損候家多分津浪町並迄上り不申候由桑名御城下四日市石藥師庄野同斷少々つゝ損し家御座候津御城下御家中崩れ家多く御座候よし津浪

大門町迄上り候よし
山田市中崩家四百軒餘御座候よし志州鳥羽津浪にゟ町並不殘流失御城は
無事に御座候御家中屋敷繼所は不殘流失家中死人八人町家數不知
右之趣實之義驚入申候龜山は尚□十分一損し家も死人も無之大安心仕御
推察可被下候
右之段荒增したゝめ申上候以上
霜月廿三日寫取

一二　江戸地震景況　安政二年十月

一於江戸去二日五ッ七分頃大地震御屋敷御殿向御門御長屋御土藏其外餘
程相損潰家等も有之御下屋敷御長屋幷御寺院等も餘程相損申候同斷に
付同剋々御府内數十ヶ所出火有之度々致地震候に付
若殿樣に者御馬場ゟ御立退被成候處御機嫌御障不被成御屋敷御火難も
御遁相成り申候
一同斷に付ゟ者
御居間向も餘程相損未地震も相止不申候に付ゟ若殿樣には五十疊敷ゟ
御住居被成追々地震相止候はゝ大御書院御小書院之内に當時御住居被
成候
右之通り御知らせ被仰進候
十月　栗林仁三郎

○
十月二日子剋吉原傾城町不殘淺草田町網笠屋茶屋土手下芝居町山之宿聖
天町花川戸馬道町既淺草觀音堂塔共燒兩門跡無別條駒形堂邊ゟ諏訪町黑
船町茅町川岸ゟ不殘新堀邊迄上野廣小路御橋南詰東川より大門町同朋町

肴店麻利支天横町長者町壹丁目ゟ六丁目新屋敷池ノ端茅町川岸をく不殘
南傳馬町二丁目京橋迄燒材木町迄西は川岸迄御丸ノ内姫路様御上屋鋪向
屋敷外櫻田忍様伊藤修理様横山様郡山様南部様薩摩裝束屋敷若狹様有馬
様備後様丹羽様大鍋島様日比谷御門内岡崎様高須様遠藤様但馬様因州様
御上屋敷深川森下町六間堀元町濱松町掛川様不殘中町一ノ鳥居龜山様榊
原様永代橋堀田様其外多分ゟ御屋敷方町家共燒失に付追ゟくわしき儀相
分次第注進奉申上候先あらまし奉申上候鳥越平戸様は多分御無別條由に
御座候相損潰候儀は相分り兼申候以上

○

御類燒

松平駿河守様
松平豐後守様

西御丸下

會津様
松平下總守様

榊原式部少輔様
堀田備中守様
内藤駿河守様
戸田竹次郎様
伊東若狹守様
〆火消屋敷
大名小路
因州様
遠藤但馬守様
本多中務少輔様
永井遠江守様
林大學様
外櫻田

松平玄蕃様
内藤紀伊守様

御本丸下

酒井雅樂頭様
森川出羽守様

○根木近江守様
小笠原佐渡守様
南部様
有馬備前守様
龜井様
伊藤様
柳澤様

長州　様　　薩州　様
○肥前　様　　御屋敷
但御裝束屋敷也

一三　祈禱之事　安政元年九月

頃日異船飄着攝泉之邊事實未辨進退雖穩去
皇居不遠因茲四海無異變醜類速退散天下泰平國家靜寧萬民安穩御祈一
七箇日之間可抽精誠被　仰下候事
九月廿三日
追申到着次第御祈始之事
滿座翌日卷數獻上事
御祈抽丹誠之事雖勿論於今度者來近海事實不容易之間猶以可凝懇祈之
事

一四　時世の演舌書　安政元年冬

嘉永七年冬
ゑへん扨兵書にもム□。先制人後制於人とは能く言たもので。此度の異船
一件は。いつも先から仕掛て來るゆへ。總ての事かいつでも此方の意外に
出て。どうやらするとあわてさわぎ。大に物を費し。後では餘りやり過たと
云樣なあんばいになり□。それは〳〵氣の毒な事でム□。これと申も難有
い大御世に住なれて。萬事御上の御世話が行屆過ぎ。下々迄か和平に流て
くつたりと。日長な時分の八ツ時過。トロリと眠りでも催ふそうかと云樣
な氣分に成て。所謂因循苟且の弊に成行□。故の事と思はれ□。昨年以來浦
賀長崎の騷動に付。御上は勿論夫々に御懸りなさる御役人樣方の御心配
なことも。唯うから〳〵聞流して。道かさし隔てゝ居れは。唐か天竺の話の
樣に播磨灘は內海ぢや。中々大船は通られす。此迄異人が來る樣に成たら。
最早世の末ぢやそんな氣遣は今度の今度の其今度。今一つ今度の其今度

迄。決して厶らぬこと抔と。戯言に言て居ましたが。實に今度は膽玉がでんぐりかへりました。もう〳〵此から彼の苟安の計策は。とんと止めぬは成ませぬ。去る九月十六日。松平阿波守樣淡州より使船を以て。播州明石川口御番所へ申こまれ□には。紀州沖に當り異船か一艘微渺に見へ□。必す御油斷なされぬ樣とのことで△ましたそうな。乃で明石より遠見船一艘出されましたところが天氣のあんばいか頓と見へぬ樣子にて。何のへんも無く申て歸りました故格別火急に御支度もなされなんだところが。十七日晩七ッ時頃。又候淡州須本仕立にて小船に櫓八挺侍二三人乘組箭を射る如く押切て來て明石侯へ注進には。右異船追々多く。唯今にては慥に三艘相見へ□。其中一艘紀州沖より段々淡州由良沖へ乘込。上郡假屋沖にて東へ乘回し。兵庫和田崎を目的に乘り付る樣子に候とのことで厶□。左右すると。何か明石には火急の大騷ぎ。諸有司打寄大評定が有たことゝ見へまして。稍久しくしかんと致して居ましたが。其夜四ッ半頃より御本丸にて早鐘早太皷を打出しました。ところが御城下の町人は何にも知らずいつも九月の常月夜。唯ぐう〳〵と寢て居ましたが。彼とん〳〵ぐわん〳〵に目を覺し。そりや御城が火事じやと上を下へ。騷ぎ出し。町年寄から提灯片手周章て陣笠を忘れたり。雪駄片足に草履片足。しはがれ聲にて喚き回り。御門々へ詰かけました扨御門の升形へ。大抵人數が揃い□と門扉がひしやり〆りました。追々御玄關御臺所へ割付られ海岸御固の軍器を持運ぶ人足を云付られ追々に繰出し。其夜中に西は明石東は舞子唐崎迄。都て九ケ所のちやんと御警固方出來ましたなんと大名はえらい物では厶りませぬか夫から所々への早打第一江戸表への御飛脚とて馬が三疋驅出しました。扨夜も白々と明け□頃毎夜大坂の湊橋邊から出て歸ります茶船と。幷に垂水浦邊の漁師共より町會所へ訴へ□には私共堺川沖邊を通り□處が。未た夜も明ぬ水烟の中に。何か眞黑な小山の樣な物か見へます故。段々漕寄り視□れば。いやはや大きな唐人船で。どうか追々東へ行樣子

に見へ□。此段一寸御屆申置□。と云捨て去ましたそうなそこで。明石侯には又一騷ぎ。さように段々東へ行と和田が崎を御固めなされねはならぬそをで。夫から追々繰出し惣勢凡そ七百人又和田へ御詰に成ました。扨翌日は十八日兵庫の濱の商人衆が。早朝濱へ潮を戴に出ました所が。何やら沖に炭團で築たる山の様な物が出來て居□から進んて見れは矢張船なり。唐人船よ皆來と追々に群集して見て居る中に段々と近ふなり□。ところが其側を東西より通り貫る小船が。皆其異船に着まして。とうやら人が乘り移る様子故。地方よりも物好な若手等が。小船に取乘り行見る處か異人共嬉しそうな顔つきで手招して乘れと云様子なり。乃て追々乘移り□。出て來る人は皆種々の指環笄菓子砂糖の類をさしつゝ貫ふて來る様子故。初はさし虛氣味惡く怖々に乘ましたが。欲張た嫗。嬶娘小娘迄が行ましたそをな。其處に一つ感心なことは娘子が行□と異人互に指ざしして氣のありそをな面色物を呉たがる様にム□そをなが眉毛のない鐵漿付けた女は手を振て掃ひ除け。決して乘せは仕ませなんだそうにム□。左すれは異人とてまんざら犬や猿とは違ひます。爪田李下の警戒は辨へだても□せぬ却て我國にそんな事をとんと構わぬ犬や猿の多ひには困ります。

卽ち田中寸松か店の手代永助と云者。其處へ行會せ早々小船に乘ましたとて。松子へ書簡を贈ました。其文中に船の大さ二三千石積位大筒片側に二十五挺つゝ仕掛乘組凡そ三百人許。帆柱の中程におろしや國と云書付御座候。上段と思しき所に役人めきたる者五六人打寄。何か帳面の様成物幷に唐紙幅位の繪圖等取出し。地方の様子を引合せ見候様子に御座候私儀は出島砂糖の様成物少々貰ひ歸り候云々。猶又予か馴染の者に。東島村魚問屋萬三郎と云者がム□。其手船ゑ船頭に勇次郎と云者六人乘組みて大坂へ魚を積て行ましたが。恰と其朝其群集の處を通り合せ。同く六人なから乘移り委しく見物して歸りました。其話と右の永助が書翰と寸分違ひはムります何と奇なことも在れば在る者ではムりませぬか。扨夫から

異船は追々と東へずつと地方に沿て乘りましたが。尼ケ崎邊より又沖へ出て夫から天保山を目的に乘込む樣子とんと我國の船か通行する船路を違へず。何んても始終測量して山の高低海の淺深を測りて居るに違いはムせぬ。扨天保山の一里餘手前に碇を卸し其儘端船二雙乘凡そ三十人許安治川三丁目より上陸し卽川口御番所へ何やら願書の樣な物を差出上げたと云事でム□。其十八日の午時すぎのことじやそうにム□。何分慰み半分にぶら〳〵して居る樣なれとも其洒落の早きこと碇を卸すと直に何の沙汰も無く直樣上陸した處は餘程氣の利た者てはムませぬかぐつ〳〵として居たら追々警固の役人か出張して亦昨年の長崎の樣に埒か明まいと工んでのことの樣に思はれ□。扨夫から大坂の話てム□。大坂の話既に十七日の日の中から御上には知れて居たことと見へまして。卽ち其夜御城内の鐘太鼓を打立上町は餘程の樣子てム□。然し大都會の事故。場末々にては十八日に異人共が上陸する迄何も知らぬ者が多かつたそうにム□。夫れでも御上へ知れていた證據には御城代土屋采女正樣が同勢四百人許で早速天保山を御固めに成りましたそうにム□。其外兩町奉行は勿論諸國御藏屋敷の大騷き。町人共は上を下へと狼狽まして早々諸商賣も休み皆門口を〆固めて早遁支度するあはてものもムりましたそうで。實に其日は往天保八酉年彼の大鹽入道か亂妨の節ととんと替りませなんだと云ことでム□。然し有難いことは早速御上より御觸が廻り異國入津のことは少し願の筋有て參しなり。決して周章するに及ず。市中一同相變らす商賣致し。海陸運送の荷物抔遠慮なく通達致す樣。別して米穀幷に金錢相場決して上騰致さぬ事と。嚴しく仰出されましたそうにム□。扨夫れに付て思ひ出□れば。今度の大當は天保山てム□。是は彼天保年中の町御奉行新見伊賀守樣の御工夫で大坂の川が近年追々塡まり□故其淩まつた土砂を此へ置て出來ましたのでム□。此伊賀守樣元來醫者の息子で在た處が。發明人でム□故。種々として御出世なされた人でム□。此

度此山が若し無つて御覽じませ。そりや臺場よ築島よと又江戸の品川と同しことて大抵な大物入ではムりませぬ。此が矢張先制（レバス）人（ヲ）てム□。そこて近日播州姫路侯よりも同勢千二百人大坂御城固になり□と云ことでム□。何分察し□處が異人の所存は帝都直願の望の樣に思はれ□。然し唯今は帝都普請の最中故決して京へ御遣りなされは致しますまい。下々でどうの樣に評定しても。夫は何も充（アテ）には成りませぬが猶上は何樣に相成□やら。夫れは追々御話し申上□でム（ゴザリ）ませう

大坂でお猿いよ〳〵牙（キバ）を咬（カミ）

沙魚（ハゼ）つりはまあやめなされ與力衆

誰（タレ）がこんなことを言たか埒（ラチ）もない　はゝゝゝゝ

寢耳　水也　述

一五　紀伊阿波其外への被仰出書　安政元年十一月

紀伊殿領分紀州加田浦邊松平阿波守領分淡路島由良湊并岩屋邊松平兵部大輔領分播州明石浦邊者大坂湊之要所に付同所最寄要害之場所ハ臺場等新築防禦筋手厚に世話被有之候樣別紙之通被仰出候間此段爲御心得御兩卿ハ御達置可申旨年寄共申越候事

十一月

紀伊殿家老ハ

紀伊殿御領分紀州加田浦邊者大坂湊之要所に付兼ゟ被仰立も有之候通右最寄要害之場所ハ臺場等御新築防禦筋之義今一際手厚に御世話有之候樣可被成松平阿波守領分淡路由良湊并岩屋邊松平兵部大輔領分播州明石浦邊も同樣之場所に付臺場等取建防禦筋之儀厚く被仰出候事に候右之趣可被申上候

其方領分淡路由良湊最寄幷岩屋邊大坂湊ゟ要所に付右最寄要害ゟ場所へ臺場等新築被申付防禦筋ゟ儀厚く手當可被致候紀伊殿領分紀州加田浦邊幷松平兵部大輔領分播州明石浦邊も同樣ゟ場所に付臺場等取建防禦ゟ儀厚く世話被有之候樣被　仰出事に候此段も爲御心得相達候

松平阿波守

其方領分播州明石浦邊者大坂湊ゟ要所に付右最前要害ゟ場所へ臺場等新築被申付防禦ゟ儀厚く手當可被致候紀伊殿領分紀州加田浦邊松平阿波守領分淡路島由良湊幷岩屋邊も同樣ゟ場所に付臺場等取健防禦筋ゟ儀世話厚く可有之候樣被　仰出候事に候此段爲御心得相達候

松平兵部大輔

松平伯耆守

其方領分近海ゟ夷國船渡來萬々一不容易形勢にも至り候節者自然京都へも相響候儀に付牧野豐後守と申談自領他領ゟ無差別相互に援兵をも差出防禦筋嚴重に行屆候樣兼ゟ手筈申合可被置候尤京極備中守ゟ援兵ゟ義相達候間被得其意申談警衛向手厚に可被心掛候

牧野備前守

同文言

松平伯耆守申談

京極備中守

松平伯耆守牧野豐前守領分近海ゟ異船到來萬々一不容易形勢にも至り候節者自然京都へも相響候儀に付自領他領ゟ無差別相互に援兵をも差出防禦筋嚴重に可取計旨相達候間兼ゟ手筈申合置時宜に寄何れ成共其方ゟ援

兵差出警衛向厚く行屆候樣可被致候

異國船渡來之節京都七口之御固被　仰付候稲葉長門守本多隱岐守永井遠江守儀と被　仰付候間申合可被勤候時宜に寄候ては相互に援兵をも差出御警衛向厚く可被心掛候委細之儀者所司代へ可被承合候尤京都火消之儀者唯今迄之通可被心得候

青山下野守

異國船渡來之節京都七口之御固被　仰付青山下野守本多隱岐守永井遠江守儀も被　仰付候間申合可被勤候時宜に寄候ては相互に援兵をも差出御警衛向厚く可被心掛候委細之儀者所司代に可被承合候尤京都火消之儀者唯今迄之通可被心得候

稲葉長門守

異國船渡來之節京都七口之御固被　仰付候青山下野守稲葉長門守永井遠江守儀も被　仰付候間申合可被勤候時宜に寄候ては相互に援兵をも差出御警衛向厚く可被心掛候委細之儀者所司代に可被承合候尤京都火消之義者是迄之通可被心得候

本多隱岐守

異國船渡來之節京都七口の御固被　仰付候青山下野守稲葉長門守本多隱岐守儀も被　仰付候間申合可被勤候時宜に寄候ては相互に援兵をも差出御警衛向厚く可被心掛候委細之儀者所司代に可被承合候尤京都火消之儀者是迄之通可被心得候

永井遠江守

近來夷國船度々渡來に付京都表御警衛向之儀彌御大切に被思召候依之其方儀京都御警衛被　仰付候松平時之助も被　仰付候間諸事可被申合候井伊掃部頭にも申談御警衛之儀厚く可被心掛候

酒井修理大夫

松平時之助

近來異國船度々渡來に付京都表御警衛向之儀彌御大切被　思召候依之其方義京都御警警被　仰付候酒井修理大夫も被　仰付候間諸事申合可被候井伊掃部頭にも申談御警衛向之儀厚く可被心掛候

別段達

酒井修理大夫

此度京都御警衛被　仰付候に付ては向後松平時之助と相手代りに被　仰付候依之當番年には二番手迄も京都に差出置非番之節も平常相應之人數差出可被置候近來異國船度々渡來に付於　御所向も深く　御心配被爲在候に付御警衛向之儀其方并松平時之助へ被　仰付候事に候間非常之節人數操出方等兼ねて手筈申合置　御安心被遊候樣可被取計候追ては陣屋地可被下候委細之儀者所司代に可被承合候尤時之助未幼年に付追て御暇被下候迄者家老名代にて相勤候樣被　仰付候間可被得其意候御警衛向之儀に付見込之趣も有之候はゝ可被申聞候

松平時之助

今度京都御警衛被　仰付候に付ては向後酒井修理太夫と相手代り被　仰付候依之當番年には二番手迄も京地差出置非番之節も平常相應之人數差出可被置候近來異國船度々渡來に付於　御所向も深く　御心配被爲在候に付御警衛向之儀酒井修理大夫并其方へ被　仰付候事に候間非常之節人數操出方等兼ねて手筈申合置　御安心被遊候樣可被取計候追て陣屋地

可被下候委細之儀者所司代ゟ可被承合尤其方儀未幼年に付追ゝ御暇被下候迄者家老名代にゝ相勤候樣可被致候御警衛向之儀に付見込之趣も有之候はゝ可被申聞候

井伊掃部頭

今度京都御警衛向之儀酒井修理大夫松平時之助被　仰付候間得其意可被申談候近來異國船度々渡來方今之時勢叡慮不被爲安　上にも深く御心配被遊候に付追々御世話も有之候事に候御守護筋之儀猶此上一際手厚に被心掛平常二番手位迄は京地ゝ差出置御守護向彌嚴重に行屆叡慮被爲安　上にも御安心被遊候樣可被取計候依之追ゝ陣屋地をも可被下候委細之儀者所司代ゟ可被承合候御守護筋に付見込之趣も有之候はゝ可被申聞候

一六　江戸狀及東海道宿々地震報知

安政元年十一月

安政元寅十一月七日出江戸書狀寫

當月四日朝辰剋ゟ江戸表も大地震に付所々御屋鋪方者不及申別ゝ御本丸所に大損し町々之土藏古家等大損し乍併當店者左程之儀も無之御安心可被成候然る處地震最中にゝ當地淺草猿若町壹丁目ゟ出火致し折節西北風殊之外強く夫々燒出し同所二丁目三丁目山之宿迄燒出し北馬屋町へ燒拔西者同町壹丁目半餘り東者大川端迄不殘燒失夫ゟ川向ゝ出火致し小梅村幷水戸殿下屋敷不殘致燒失候併同所町も三四町餘にゝ相鎭り申候淺草も凡町數十二三丁餘も燒失凡家數三千軒計と申事に御座候觀音寺は極近火に候得共漸相殘候尤東橋にゝ燒留翌六日曉寅上剋火鎭り申候且又地震之儀者未た時々震候に付實に不安心に存候何分に

も此上大變之事無御座候樣奉祈候

十一月七日　江戸　某

尙々唯今手紙認居候處遠州掛川太田攝津守樣急飛脚着候ゑ承り候處掛川城内も誠に大變之事之由咄し有之候左候得は遠州三州兩國共同樣之事に候御地者如何に御座候哉御伺申上候

○寅十一月七日朝辰剋東海道筋地震

一小田原宿

人家少々損候左程顚家人等無之趣

一箱根宿

人家七八軒計土藏少く損し

一三島宿

人家者不殘潰れ其上出火過半燒失卽死等も多分有之怪我人等數不知候趣

一豆州下田湊

人家不殘打潰れ尤町數十八町計有之半分餘も津波にゑ海へ持出候趣追々申參候

一沼津宿

人家不殘潰れ其上水野出羽守御城内不殘大損其上出火之趣怪我人卽死數不知由追々申參候

原宿　吉原宿　蒲原宿　由井宿　興津宿　江尻宿

右何れも人家潰等有之由左程怪我人無之趣

一駿府宿

御城内大損人家共不殘出火致し輕家人者數不知候趣申參候

丸子　岡部　兩宿

人家少々潰れ候趣土藏者不殘震落候旨

一藤枝宿

御城内平に打潰れ其上出火にゐ過半燒失卽死幷怪我人者相分り不申趣誠に大變之事に御座候

右其先々の所唯今迄聢と不相分候得共不取敢申上候

一甲府表

右大地震に付人家不殘潰れ御城内大損し

其餘信州路之儀者地震致候趣承り候得共申參候無之相分り次第早々可申上候

一掛川宿

人家不殘燒失致し御城内大火怪家人卽死人數不知趣

一袋井宿

人家不殘燒失卽死怪家人多分有之中々筆記には不成申候由

見附宿

人家不殘打潰れ怪家人等多分之由未た日々地震三ヶ度計震申候由

一七　地震に付松浦竹四郎よりの來翰　安政元年十一月

松浦竹四郎ゟ勢州足代權太夫ゟ　安政元十　一四

昨四日下田表大地震大津波丸潰れ仕候人死六百餘人神の助にて私は死を逃れ申候異國船半潰れに相成申候恐惶謹言

五日朝

皆々樣へよろしく奉願候

松浦竹四郎

足代先生

尙々御地如何御座候哉御聞せ奉願上候愈御安泰珍重御儀奉賀候然者拙子無異罷在候乍恐御放念可被下候扨當月四日朝五つ貳分五厘計りの頃當下田湊大地震にゐ土藏等壁落土地少々割申候所ゟ泥を吹出し市中大騷動仕候處一剋計りも過候間に大勢又々騷き立候間出火と存し表ゟ出申候處烟も不見候間是は定ゐ異人共亂妨仕候事と存候故我等も内へ脇差を取に入候處早や市中に大浪參り申候大工町川岸に大船の帆柱動搖つ山際に登り旅宿本覺寺ゟ行んと存候に早市中一面波にゐ中々渡り難く候間早々萬仙寺と申寺ゟ山ゟ登り見候處早一の瀨は其節引去り申候故其波の中を渡り候て逃去候市中幷諸役人等も皆々山ゟ登り申候然に亦烟草一二服計りも呑み候間に二つ潮來り候哉何れも大周章騷き上申候大工町の邊に烟立上り出火々々とさわき立寺の鐘を撞きかけ河治川邊に亦々出火ゟ由にゐ燃立候間二の潮柿崎濱ゟつきかけ浪除土手を越して下田湊ゟ參り其浪にて二ヶ所の出火は委く消散九百軒の人家一時に將棊倒しに相成申候て青梅原相成候八百石以上ゟ船十四五艘程下田町を相越岡田村本郷村の畑中又村中に上り其時異國船者君の浦と申所に繫き有之候處纜切れて尤走島の上の方鷗島の下の方に漂ひ來り候處早屋三段に掛けし檣一段と相成り大ゆれとなりて流れ來りしか其二の潮引につけて元の邊りへ立戻り扨しはし有之候ゐ三の潮柿先ゟ突かけ候處此潮にて百餘軒の柿崎村一時に碎け皆流れ亦其邊りに繫きし大船共十七八艘（此船は七八石より千石以上に御座候）村中に打上り碎け流れたり其潮下田の方ゟ回り來りたれ共最早一軒の家も無之青海原事故其潮本郷中村岡方村の邊一面にさし込にて山際まて打掛けたり扨其時異國船七八分傾き損し候ゐ鷗島の方に來るや最早大半破れ候樣に相成候間親を失ひ子を失ふ人民も一時に大歎聲にてシタリヤ〳〵と憂苦ゟ中に歡ひ山の上畑の中にて大聲を揚けて悅ひたり此時大變にて失ひし面色を改め拳を握りてツキタヲセ〳〵と皆一同に勇み立申候其聲しはしやまざりけり扨其

二の潮三の潮にて子を抱て逃る女や親を負て山に登るも皆水の底にしつみ或は樹木の梢に躋登り又流れ行くや根の棟に乗てさけふ聲實に目も當られぬ有樣なり然共其中にも異船欲覆ときは其者共シタリヤ〳〵と喜ひけり四の潮五の汐も最早道々干方にも成時節に付追々輕く相成候故又流るゝ家も無故に大に靜り候に村山の上に逃上りたものも皆九ツ時頃に下りて下るなり扨川路樣松本樣等皆々本覺寺山の上陣取馬印幕を押立候間其中に籠りたまひ彼所此所に流るゝ伊丹樽の鏡を拔て飲み又井戸は皆々埋もれ川水は一滴も無之樣に成其邊り皆々滄海と相成候間飲水と言ものは更に無之我等共儀は渴候得共酒を飲み畑に出て大根引て喰ひ飲食少しもなく實に地獄我鬼修羅の有樣一時に來り候計りさ次第に御座候又其中に諸役人樣御旅宿の其騷きを見掛て盜人に入候輩も有之候實に我等か筆狀に盡さるへき事無御座候僅一二時計りの間に千軒の下田湊百五十軒有之岡田村漸殘る處は坂下町と申は十八軒有之候處御座候其餘山の際に立候寺は半潰れ位に相成候其寺々御止宿に相成り候伊澤美作守樣宿寺も皆流れ書籍類多分失られ申候由御座候都築樣御旅宿皆流れ荷物無之候村垣樣御旅宿長樂寺垂尾少のいたみ應接場福泉寺流れ申候筒井樣御旅宿海禪寺皆流れ川路樣御旅宿泰平寺皆流れ松本樣御旅宿本覺寺皆流れ其外魯西亞人休息所皆流れ小普請所半流れ黑川樣新宅御役所皆流れ同心屋敷十一軒新宅皆流れ魯西亞人小休息所萬仙寺半流れ其外御勘定衆御徒士目付御普請役衆は皆町宿に御座候間着のまゝにて外出され候計の事に御座候猶青山樣用人筒井樣六尺日下部樣家來其外諸役人衆家來多く溺死有之候又日本人三人ゟ内男二人異國人船ハッテイラ一艘柿先濱に打上七八人乘居候も餘程いたみ有之或は外二艘程碎け申候右五六人の夷人は翌五日の晝頃迄柿崎邊ゟ畑に大根を喰て居申候五日漸々送り屆けに相成申候亦楫は折れて柿先濱に打上船底の敷板碎けて妻ノ濱と申處打上當時五六十人計りつゝ日に上

陸仕候事致し居申候又異船に水入候由にて日々水車貳挺つゝにゐ水かへ居申候右水車少し油斷致し候直に貳尺計水深成候由船中必死働き居申候我等は泥中ゟ俵を引上け玄米を鍋の破れにて煎て喰居申候井戸は埋れ是をかへ候ても汐入候て少しも飲め不申候渇候時頻に酒を飲申候其夜三度計り地震ゞ、得共さしたる事無御座候五日又九ッ頃大津浪來候由誰言となく風聞致候我等本覺寺本郷村ゟ引移り止宿仕候處夕六ッ半頃又津浪來り申候下田岡方村ゟ上り候得共最早流るゝ人家無故にさしてさはき不申候此潮凡十町計上の方迄來り申候六日今日諸役人樣方惣寄合にて村垣與三郎樣夕七ッ時頃より和本村迄出立に相成候江戸へ御越に相成候今日ホーチヤチン。ホスセット。リソシケ等上陸仕候中村爲彌横田新之丞永村六郎應接有之候異國船大破に相成引取兼候に付乘船作事ゟ儀願出候七日ホーチヤテンホスセットリソシテ等長樂寺ゟ上陸中村横田永村應接有之候今朝ゟ魯西亞人共鼻黑辨天に大砲不殘上け申候ゟ追々普請に相懸り申候右に付下田湊にて出來兼候に付兵庫遠江濱松兩所ゟ内拜借仕度由願出申候由に御座候八日又中村横田永村等長樂寺ゟ出て船よりも上陸仕り應接有之候左ゟ通り持上り申候阿部侯ゟ寫眞鏡道具式エレキテル道具一式八疊敷の靼通。花毛氈一枚猩々緋一反紫ギヤマン花生一對虫目鏡枕時計筒井樣大鏡高さ一丈巾四尺本國燒花生一對白銀の太刀一振遠目鏡紺羅紗一反川路樣大鏡如前一白銅の茶ひん高サ三尺計稀代の物渾天儀琉金（全カ）地球の器黑羅紗一反松本樣川路樣同樣伊澤樣紺羅紗ヲーゴール都築樣紺羅紗ヲールゴウル其外古賀村垣黑川等ゟも進上有之略す此方より被下物は未遣に相成不申候得共何れ近々御遣に相成候被下物アヒル百羽素麵五箱いも十三貫目一俵ねき二俵大根五百本にんじん五百本玉子千其外米穀も餘程薪水は不及申被下に相成同日川路樣ゟ猿一疋重組壹荷被下に相成さま〳〵夷人の御機嫌を御取被成實に長大息ゟ至に御座候扨又今日應接有之處船中最早飲食無之

三日の貯え漸々の事ゑ由に御座候ホーチャチンモ蒸餅を喰て茶を飲候計の由に御座候實に轍底ゑ至りゑ由願出然るに彼等ゐ誰か内通致し候者有之候哉近頃又志州鳥羽湊拜借願出度由又々申出候實に獅子身中の虫の多き世の中に御座候同十一日異人四人御小人目付山田八郎御普請役萩野才助下田同心服部建藏等同道にて網代より熱海邊を巡見に行れ申候此網代湊宜敷候はゝ此處にて作事に相成候由に御座候十二日櫛崎村玉泉寺にて筒井河路兩奉行御目付衆應接に相成同日玉子干素麺向々被下に相成候如此異人に諂候世ゑ有樣天神地祇も惡み給ふ事は歎息の外御座なく候乍併霜月八日には終に異船一艘貳百尋も有之候海底に沈沒致候由慥成儀に御座候扨々近頃愉快此上なく歡喜雀躍不堪荒々申上候早々謹言

臘月七日　　松浦弘　百拜

足代大人　玉案下

猶以下田湊流失の分は百十六軒同平潰二十五軒同水かぶり十八軒同死人八十四人岡方村十一軒柿崎村七十二軒本郷村二十七軒中村十二軒其外家樣人數小普請方日雇の者船頭船方凡六七十人大船凡三十五艘に御座候其餘松崎村不殘に流れ申候何歟書記し度義澤山に御座候得共犢鼻褌も無之次第に御座候間猶後便可申上候例ゑ亂書御推察奉希上候恐惶謹言

一八　魯西亞ゑ來翰及同回答國書　嘉永六年八月

大君皇帝（カサール）首仁幸來俄羅斯統輿（ソウコウ）主宰之上宰相（レイクスカン）子也利羅能遞寶（サシアクル）　文

大日本貴御老中（ニ）

能一本作穂
文字一本无

大君皇帝俄羅斯統輿之主宰。遠視貴國當日物情。日思兩大國疆域相錯之重事。遂起善意。乃選御前大臣俄羅斯水師將軍布恬廷永平。奉施全權遣使前往大貴國。志之一者。乃詳細誠列當日一世之衆變。貴國之情形如何。爲以至露懷貴國命運所感之心是也。再者。乃（題起兩件事。以使兩國屬人皆得進其益。以斷決兩國來日相磨相疑之處。即以至于相和平和之誠實也。）首件事。

大皇帝所愿行者。乃分明邊界之地。北事既知當日物情。及視圖注兩國衆海有何無所籌之圖。便（不可再日久推延之。是以）

大皇帝以爲緊要。今即起事。相會商議。方定決貴國屬之海島。何當算北方末尾之界矣。本國所屬之海島。亦何爲南方末尾之界矣。以外愿兩相說明からふと之南岸如何也。

大皇帝既主俄羅斯。自古以來未有之國。大廣如此。自然無需要得何新地。然而不堪失屬人之眞利。因靈明思之。明定兩國疆界者乃爲相和平安之本也。第二件事。

大皇帝誠所願行者。乃准本國屬人無碍來到貴國海口相換貨物交易。臨時本國兵船渡海往カンサヌカ及北アメリカ地者。有緊急事。須到貴國海口以備所需亦禁傲其意之也。無疑。

貴國必明此愿者。絕無犯

貴國之眞利也。於於與通

貴國以交界之故。彼是相交。自然之理義。有大而越過他各遠國之理。亦可明之矣。此皆該御前大臣水師將軍布恬廷所奉命詳細傳明之貴御老中。遂越可見本國意愿者。絕無所不符校輿正理矣。此事皆該將軍所欽奉全權。尊照細訓勅令會貴國大憲相與議論而尊照上命立定約會章程矣。總而言之。遣使朝

大日本國

大主之定向者。一則。乃開發本國意想天下當日物情察如何。二則解明分疆界緊要之事。三則。開啓兩國屬人互相有益有實之交。以致兩大國於至善至寧之地位也無疑明欽差有大重事御前大臣水師將軍布恬廷

貴國必待厚照禮秩與其高位矣亦無疑

貴國

大主之智賢宰相諸老皆留心察本國所題之事皆事及該欽差大臣所命謹列之解語即行勉力安備相互有益事之始終矣

書在御都さんへてりぶりけ八月二十三日一千八百十二年

大君皇帝俄羅斯統輿主宰即位以後二十七年

本文下書國宰相國公子也利羅德印

○

大俄羅斯國御前大臣欽奉全權使東海水師將軍布恬廷爲

照會事謹傳本國首宰相國公子也利羅德所書之俄羅斯又加阿蘭陀之語遽至

大日本國

貴御老中以易通明本大臣遂照副本加唐語以遽之自是國公子也利羅德之文

貴老中必可見本大臣來此有大重事以緊急之良分明兩國疆界之事也此事也者必宣貴御老中會于本大臣兩相議論之盖　貴國必不堪使本大臣一人去檀定兩國之疆矣議論此大事之人遂時必宣遞摺至貴御老中遂因以即得依儀之勅必宣居在御老中所在之處江戸可辨十日以內之事長崎必需數月之久矣是以懇乞貴御老中無遲使本大臣帶緊要之人至江戸無遲起事以論之往江戸如何本大臣遂遵照貴御老中之意若海路走本大臣遂有四艘若貴御老中不依之本大臣遂候准走旱陸因尊聽信爲此照會順候

近祉須至照會者也

右照會

大日本國御老中

一千八百五十三年九月九日

癸丑年八月十九日

○同回答國書

伏接來札知

貴國御前大臣布恬廷所啣命航來親遞而其書實係上宰相子也利羅德公見贈焉閱書中所陣述云

貴國

大君主思我兩國邊疆之交錯欲加釐正備悉意旨又云

貴國既據古來未曾有廣大之邦土無要別得新地持盈保滿之通良宜爾且我邦與

貴國各土其土民其民無事相安原靡開衅之端乃今般使節之舉其出好意而不出惡意亦爲彰明較著不容疑者

貴國既以好意來我邦何得不似好意相報邪第邊土之經界

貴國以爲甚不明晰則諸飭邊藩細加查覈而差大吏與

貴國官人會同商議以歸劃一然邊藩之查覈必按圖籍確有憑據愼重從事不許絲毫疎謬是固非今日所能辨也若夫貿易來往之事則祖宗道法有勵禁歷世所遵奉弗失故曩者

貴國嘗有開市之請而我邦業已固辭愈其顚末公等所克悉也但現今宇內形勢變遷貿易之風駸々日長誠不能取古例律今事頃者合衆國人亦來乞市日後列國之乞市者必接踵而至夫列國乞市之繁如此乃是我盡一國之力應承星羅碁布之萬國其力之給未可知也且如我境內邦土之貢撿其多寡精粗亦豈旦夕可辨之事邪矧我

君主新嗣位百度維新如斯等重大事項必奏之京師諭告之列侯郡官協同商議議定而后從事顧勢不獲弗三五年之時月雖差似延緩　公等且從吾言坦懷以俟焉迨議論一定諸事整頓之後使當登時報聞也況我國之於

貴國壤界相接宜加鄭重故特遣重臣二員於長崎會晤布恬廷以盡其曲折而其

他所宜布報者亦皆俾之面悉幸有以諒之不宣

大俄羅斯國上宰相子也利羅德公閣下

大日本國老中

阿部伊勢守正弘
牧野備前守忠雅
松平和泉守乘全
松平伊賀守忠優
久世大和守廣周
内藤紀伊守信親

嘉永六年癸丑十月十五日

十月晦正使二員　西城留守筒井肥前守某班大目付三千石高　勘定奉行川路左衛門尉聖謨

鑒察一員　荒尾土佐守某　儒者一員　古賀謹一郎增　布衣二百俵高

發江戸或云此書以復月十一日遞發

一九　或僧歎願書　安政二年正月

毀銷鐘鑄造炮之事

安政元年十二月廿二日　宣旨

夫外冠　消息　宣下

上卿權大納言實萬

辨

不可存異議者　奉

藏人頭左中辨藤原光愛

○

或僧歎狀

感激於國恩之徒謹獻書哀訴爲國家，

陳利害書

安政二年正月某日。某等北面再拜。誠恐誠惶頓首言。窃聞近歳洋夷渡來。屢窺邊海事情難測。

宸襟憂念。將令諸國寺院毀銷梵鐘以鑄造炮銃以備海防之用。伏惟夷虜猖獗無禮。凌蔑皇國。々家之患。無甚于此者。勿論士庶在緇流僧侶。猶且無不爲之扼腕切齒者。且夫僧侶雖世外。自古職在祈禳妖氣護衛國家。當修其法之所護。盡其力之所及。以答國家若梵鐘則雖寺院不可欠之物。苟爲國家有所用。則豈有所顧惜乎。然而某等有窃惑者也。何則諸執事所籌畫於時勢之宜。謀之已熟慮之固。詳宜無所不盡焉。唯其寺院之事。有大不與俗家同者。諸執事或未盡其詳者。蓋寺院雖屬僧侶。實非僧侶之有。闔寺一切法器鐘聲。皆是檀越之所寄。與檀越之所護持。非住侶所得而恣也。故鑄一鐘造一器。歸依之檀越貴賤甲乙。總爲天下安全。報國恩之厚。或爲其祖先。懷追孝之志。或爲愛兒。祈冥後之福。不顧其身之凍餓。賣衣減食或不難辛苦奔走於遠近。以請衆人之力。以助其鑄造。雖一器一鐘。皆是千心萬魂之所寄也。而今將毀銷之。假令現住僧侶盡力極口以諭告之。賊陋之性。頑愚之民。不能知國家之深慮何如。唯固信從前僧侶之所說。以鑄鐘爲大功德。顧念精神之所注。當痛恨悲惜。不翅恨。現住僧侶而已。亦將移恨于外矣。陋愚之難諭。或將言國家銅鑛甚多。肆上所嚮。亦不少。求之何有。而獨取我儕盡心力之物。以造殺人之凶器。使我祖先之志願廢滅。人心有所不服。而强諭之。則恐將致騷擾也。若昔年黨人起於參河。可以見矣。蓋人心所皈信。有不可如何者。是以自古聖主明公。因佛教以爲懷柔人心之助。豐臣氏造大伽藍鑄大梵鐘。無不出于此矣。在當今最用心于此營築諸國寺院。不惜材用。所以皷舞人心。而懷柔之。無不至也。窃謂懷柔人心者。在今日最不可忽者。而毀鐘之事。恐非懷柔人心之助也。且夫寺院之設。雖遍于天下。而宏壯富有者。寡而肅舜窮之者。十之八九。未必寺々院々具梵鐘。雖盡數而取之於國家。未足以爲大益也。而名乃爲毀天下之梵鐘。則其名甚大。而其所得甚少。所得少。則不足以助國用。其名大。則足以驚愕人也。況乎。賤陋頑愚者多。而智識聰明者少。以賤陋頑愚之民。聞驚愕人之事。以不服之心。懷痛恨悲惜之情。而相唱誘

則騷擾之所由而生是某等所以爲疑惑者也方今仁聖在上群賢森列於此等事豈有不知之理乎唯其憂國之急切將以疾禳深患使丙兆民長樂太平不遑顧此也然人心民情之所關不可爲小事以遺棄也伏願明德深仁政化明若日月恩如兩露察某等之誠衷憫兆庶之哀嘆及明詔未布辱賜高裁請換梵鐘以他物且梵鐘有刻列聖之尊號及國家安全字毀銷之亦似爲不祥寺院之諸器不必用銅器者則改以陶器木器而換之使乙子院聚而致之於本寺應梵鐘之量以獻之則不至毀梵鐘而有梵鐘之銅不至驚愕人民助鑄炮之用矣如此則不獨諸國之僧侶感荷仁恩四海之兆庶亦將作舞驩呼也凡在天下之僧侶勿論何宗派無不浴于國恩者孰亦不以護國爲任哉然而我宗則於國家得恩遇最深自本寺暨末寺子院之僧侶日夜感激皆以國家之憂喜爲己之憂喜無不思所以報答者苟有於國家不便者不可不敢言也伏冀垂憐鑒察濵冒威尊皇懼無已某等誠恐誠惶頓首再拜謹言

安政二年正月

原朱書
借公純卿走筆

同二月

二〇　伊勢へ勅使宣命　安政二年二月

天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃渡會乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立高天原爾千木高知氏稱辭定留天照坐皇太神乃廣前爾恐美恐毛美申賜者止久申皇太神乃厚御恩爾因底食國乃天下無事久無故久安賜比治賜比爾頃年夷船渡來此乃神國乎汚辱古止毛有倍者止久也恐理給比患倍給比爾志不量毛去年乃四月爾祝融爲崇氏內裏炎燒奴引底及民屋利又六月爾畿內乃國地震氏不輕其秋又夷船攝津國乃海岸爾來利着奴禮止不日毛飛帆氏伊豆乃下田爾向止聞食須間爾十一月上旬爾畿內與利東西南海乃諸道乃國々浦々地儀又震比津浪擊揚氏或者城郭顛倒禮或者民舍毀壞氏公民乎損害奴爾後又烈風揚浪氏彼

夷船毛沈沒止聞食須是
皇太神乃廣前厚護奈利止悅比畏利給布曾毛曾毛加久災變乃重氐來古止者朕加
薄德爾依氐加志殊爾御世々々乎經氐未來夷乃屢來古止者若久者覬覦乃志毛有良牟
寢氐止加寤氐毛深久恐理深久愼美給布
神奈加良毛此狀乎聞食相宇豆奈比給比相扶給比天縱來奈利災奈止毛未萠爾撲滅
志給古止者偏爾
皇太神乃御助爾可有止牟奈故是以氐吉日良辰乎擇定氐王官位姓名中臣官位
姓名等乎差遣氐忌部位姓名加弱肩爾太綱取懸氐禮代乃御弊爾金銀乃御幣
御鏡等乎相副氐持齊者利令捧持氐奉出給布掛畏岐
皇太神此狀乎平久安久聞食氐
天皇我朝廷乎寶位無動久常盤堅盤爾夜守日守爾護幸給比底國家安穩爾萬民
娛樂爾恤助給倍止恐美恐美申賜者久止申

安政二年二月

右廿三日巳刻發遣　上卿右大臣忠熙公　專同九月例幣

王使　侍從資訓朝臣

一社奉幣　中臣、　祭主數忠卿

齊ア、　眞　繼

二一　吾妻妖談略婦美の寫　安政三年八月

秘說吾妻妖談略婦美の寫　全

一安政三年辰八月二十五日夜五ッ時辰巳風はけしく先日本はし南方品川宿は大半損し南品川不殘獵師町出水にて津浪如く不殘流さる〳〵沖にて在る大船五十艘ほと行方不知御臺場は所々損し夫〻高輪邊は不申及三田邊田町邊大きに損し夫〻芝浦に打上る金杉橋邊は打網海手不殘大船十艘ほと打上る出火場所は片門前一丁目〻神明町片た側にて燒止る

大久保樣森樣新錢座大損し大小船數不知打上る御濱御殿築地海邊大損し西本願寺本堂は打つふれ寺中大半損し表門前に大船打上る鐵砲洲邊不殘佃島大きに損し靈かん島邊永代橋大船當り中程ゟくつれ往來止り此船帆柱は田安樣御門前へ打上る御長屋くつれ其邊は茶船十艘程打上る夫ゟ深川海邊津浪にて大損し假宅遊女屋丸くつれ洲崎邊木場不殘又御船屋貳ヶ所損し其外本所邊出水にて大損し亦々此方神田邊不殘馬喰町兩國邊淺草御藏前觀音樣御とう無滯御山内は不殘損し矢大臣門外松田屋と申遊女屋くつれ花川戸山谷邊芝居町三座とも大損し千住邊不殘亦西ノ方丸の内諸家樣方一圓打つふれ下谷邊のこらす、は一圓白山邊坂本邊吉原境内より本郷邊大損し其外山手不殘右市中一圓に大損し

二二　見聞記　安政四年

見聞記

安政四丁巳亞夷登城に付水府老侯常磐井殿へ文通之寫

此度夷情切迫之義に付存寄申上候次第

乍恐以書付言上仕候昨年中亞墨利加之「コモトール」と申者豆州下田湊に來航之節コンシュルと申者連參候に付此方官吏相斷候へ共不聞入留置歸帆仕候故無據下田内柿崎玉泉寺と申處に右之者差置候處其節ゟ度々官吏と及應接或者劔を拔て奉行を嚇し或は通詞之佩刀を踏み抔其外種々驕傲無禮之言を吐是非江戸へ參り將軍に對面致度由申張如何樣致理會候へ共不相用不許に於ては直に兵端をも可開體を示し此方を劫候故官吏者致恐怖此節に至ても彌其望に任せ江戸へ引入登城可爲致由評議決着之處右者誠に不容易之義故大名中も有志之族者異儀有之由承り申候一體西洋諸蠻之吾國を窺候者數十年前より之事にも近比に始り候事には無之候へ共亞墨利加之吾國へ望を掛候者近年阿蘭陀言上書より始ても相見既に弘化年中「ボストン」（亞米利加三十一洲之内）人浦賀へ來航交易相願候抔を始と

し其後嘉永丑年に至り不意に江戸近海に乗入天下大に騒動し遂に其書翰を栗濱にゐ受取候始末國體を汚候事を有志之士皆々致切齒候處其翌年又々内海へ乗入此度者遂に横濱之應接に相成吾國開闢以來未曾有之大耻辱を受候次第に御座候此兩年之事にゐ夷狄吾國之衰へたる事を推察し打繼き魯西亞暎咭唎等諸夷長崎へ入り大坂へ下り箱館へ入り津々浦々測量上陸等亂妨狼籍之次第に御座候一昨年は件之「コモトール」下田へ參り候節沿海之地測量致度義を願出し未挨拶も無之内に出帆東北諸國之沿岸を不殘測量此度に至り竟に江戸へ入候樣に相成候事之始末を相考候に最初者書翰を渡し候而已にゐ次に兩國和好取極互市場相開き其次に沿海之測量を願出此度江戸へ押入候事皆彼深謀遠慮にゐ此等之事を不殘一度に掛合候ゐは承知不致手切に相成一國必死に相成候半と察し段々と淺か深きに至り遂に其大に欲する處を遂むと存候心術明々瞭々に御座候都ゐ西洋夷之氣質事を氣長く謀り火急にして事もし破り敵人遂に怠り我を取るを忘る樣に仕掛常々此を以て世界中之諸國を呑併し來候事將吾國一國之事而已には無之候先つ第一和義を結ひ交易を始め其内自國之利潤を得遂に釁端を求め其國を覆す其計策誠に惡むへき之至に御座候然るに今幕府之諸役人皆和義を主とし候次第は一に天下之安逸に狃れ苦勞を厭ひ自分の役目を大切に致し無難に取計長く利祿を保ち候事を謀り一は近頃流行仕候蘭學者と申者大體皆無識之徒にゐ彼かする處に目暗心醉遂に彼は至ゐよき國我は至ゐ愚なる國の樣に心得二百年來國を鎖し外夷之通路を絶候事抔誠に固陋之至にゐ公平之道に非す彼か和を求るは全く公平の道にて必しも人國を奪むとの意には無之候と申說起り諸役人共是に惑ひ自身難なく役目を永保ち度心と符合致し遂に戰に成り候事者戲にも不言只和義而已致主張今日之次第に至り候事に御座候併是は全く庸俗之見なる者にて古今之形勢此役之情態を洞見し候人物か見候へは其利害判然たる事に御座候昔かケ樣な

る事數多有之其時之役人者皆々和義を主とし國を誤候も其主意者大抵是を以て一時之危難を救ひ時を待より外に計策なし戰を說候者之論を粗暴にして事を破ると申國を大切に致候心得にも可有之候得共畢竟庸人之見にて人情者安逸を賴み勞苦を厭ふ者萬人之同する處にて一旦落付候得者假令國之辱にても國之讐にても遂に其儘に成行國次第に衰微し滅亡に至る事自然之勢に御座候又諸役人共之恐るゝ事は彼は大國我は小國彼は戰爭になれ我は太平久しく武備を廢し彼は財用に富み我は國用窮乏等之事に候へ共是等は憂るに足らさる事に御座候國之强弱は必しも大國小國には不拘當時暎咭唎の如き我國にも及はさる小國に有之候處海上には敵なしと申程の强盛に有之印度之蒙臥兒（モンコル）抔も世界中之大國帶甲百萬と申國に候得共遂に暎咭唎の爲に鯨食せられ滅亡に及ひ滿洲の如き大國も又彼の爲に敗衂をとる是等を以て見候へは國の强弱は政事次第にて大小には不拘且又古來風俗之强弱にも拘り可申と存候

一體吾國古來之風氣勇猛果敢なるにて萬國畏れ候事外國の書にも相見申候當時武を廢とは申候へ共夫は畢竟以前太平を致すが爲態々人氣も不得止屈し候事にて古來之風氣全く消失候と申には無之廟堂之議論さへ一決致し候はゝ皆々奮發し古來勇悍之氣に立歸り身命を抛ち御國恩を奉報候事無疑義前書にも申上候通り

皇神の深き御思召にて吾國古來武を貴ひ忠義を專らにする風俗實に他邦には無之事に御座候當時人心之怠り居候事決て御憂に相成間敷奉存候且又當時財用不足と申事は畢竟諸役人共未た太平之醉醒めぬ故に太平之儀式をも是迄之通に行ひ戰も出來候樣用意致せと申候樣なる事に而是迄さへ不足之處又々新に武を張候樣相成候而は別て究迫と相成候事必定に御座候唯今之勢にて如何程生民之膏血を絞り手段を盡候而も唯人心を失ひ候而已にて是にて富强に成り候と申事決して有間敷奉存候右等之處を申譯とし當時夷狄と和を結ひ候事情を推考候に畢竟不好

戰利祿を全し無事に事濟候を幸とし候心底より起り候事無疑候一人一家之爲には可宜候へ共天下國家には大害を殘し必す前古之覆轍通に相成可申實に深憂之至に御座候唯今役人共唯事を生し候を恐れ候而已にて大勢の機會と申事を不知唯今は危き故彼と和を結ひ其内武備を立可申と存候へ共天下之大勢と申者は左樣成物に無之已に前件にも申上候通り和義一度定候得は彼は益其策を施すことを得吾億萬之衆皆和に安し落付候得は最早以前之激候勢は消失辱をも仇をも不顧樣に相成候事必然に御座候機會之來間不容髮と申候豐臣秀吉か濃州に在なから賤ケ嶽之戰を聞き即時に馬を出し柴田勝家を敗り候如く暫時之際にて大功を顯し候事も其機會を失ひ候得者返て難事と相成出來候事も不成事故英雄豪傑之士は必申樣成處へ心付候へ共庸俗之目には見え不申候丑寅兩年抔之時に當り秀吉如き者其位に居り候者必其機會を失はす一舉して大憂を除き候事必然と奉存候就ては此度夷情之事に付京師へ申上又三家等へも觸有之趣書付見受申候乍憚其藩者泰より夷狄之事を憂ひ罷在且　朝廷を尊ひ奉り候事は兼々心掛居候故此度之儀に付ゐは甚心配仕候樣子に有之最早内々國中内意も仕居候趣他之大名中も餘程者不服之者も有之諸役人共是にも甚差支進退成兼候樣子に承り申候誠に危急存亡之秋とは申なから又　皇國復興之時合にも可有之奉存候愚昧之賤臣なから右之危急を坐視し機合を失候事誠に無念之至り仰き願くは此機合に乘し早速　御決斷被遊右之義不相成樣嚴重關東へ被仰遣仕度候者必某藩之如き大小名力を得心を合せ數十年來之大憂を除き候事必すは是より始り候半と奉存候扨當時　京師御警衛向不行屆之儀御配慮被遊候趣に下々にゐも沙汰仕候誠に恐入候御事に候得共萬一非常之節者某藩の如きは兼々心掛けも御座候故遠地たり共早速驅登り御警衛爲仕候心得に御座候近國大名之内にも有志之心掛御座候者數多御座候樣にも承り及候間强ゐ當時御手薄之義御憂慮被遊間敷奉存候唯々天下古今之

忠能云朝廷此處肝要之文不可忘也

形勢を御洞察被遊今日彌和義定り暫時太平相繼候者必す　御國之御大憂と被思召御英斷被遊候方可然奉存候假令萬一御主意に不被爲叶候共此度之事を誤候者全く幕府之諸役人共之所爲にゐ　朝廷にゐは決して其思召に無之と申候得者天下有志之大小名始め一同憤發致し恢復仕候期も可有之左無ゐは　皇國之辱を萬國に晒也　國體も不相立候樣に相成其上天下後世よりは當時幕府之諸役人之罪者誠に數るに暇あらす　朝廷も亦無之と見へ如此之大變にあたり遂に一言も無之と傍觀せられ候と被申事實に殘念千萬に奉存候當今天下有志之士大抵右之大意に有之號泣于旻天と申志なきには無之候得共地に偃り國に閉られ誰有て控告する者なき次第に御座候某身不肖たり共今日にゐは天下有志之人之代りにも相成候心得にゐ言上仕候心得に御座候宜御英察被下候樣奉願候以上

右政通公へ齊昭卿ゟ四年冬來文也此寫林津田の如き手に入速達江戸之處諸大名へ蠻夷之事京家へ直談之大名も有之由慥に聞候心得違之義於此度不被憚其人自來必可爲禁止觸示有之よし風聞あり又阿州ゟ政通公へ內啓の文も同樣是は寫を直に自閣老爲見及尋糺由也

二三　江戸より來翰の寫

江戸來翰寫

先便御咄申候トウンセント、ハルリス、去月廿六日には備中守樣御宅ゟ被出應接願筋申立其後日々於御城ゐ大評定御座候處未御返答被遣候樣には難相成蕃書調候處逗留に有之遊歩仕候樣被聞候得共事たる用向相濟候ゐ遊歩可致とて相動き不申候いつ迄御返答相待旨申出返答を待候ゐ餘り退屈に御座候樣に候哉一番町之馬場に行時々乘馬致す樣子に御座候此比御老中方退城は八ツ半時ゟ七ツ或は七ツ半時に及候事も御座候願立之委曲は何分唯今御返答書に相及候樣には難相成候書翰にハルリス口上之趣內密

相寫御達し申候御内覽可被下候重大之事件は惣てハルリス胸中に有之趣に御座候巴津滯留際限無之限りは明春に可相成歟に奉存候

來翰極内密封書

扨巴津願之趣極々内密昨今に至り探り當り候儀は江戸拜禮に參り度且品川内海へ舶を寄せ品物數多交易江戸の内にて一ヶ所屋敷被下候ゑ數人相詰度申の由右一件御聞濟不被下候時は軍艦差向て勝負之上にて取計申候旨申述に御座候右御返答廿七日ゟ今日迄大評定御座候へ共片付不申と承り申候如何相成候哉尚此餘之願は細少之事と承候別て申上候不日英夷より使節可參軍艦三十艘參の趣不容易之儀に申候近便に委細に承合御咄し可申上候且又書翰中之文意彼ゟ取極御座候は如何譯やらん相分り不申尚事々御咄可申候以上

十一月十一日

或書翰の寫

アメリカ箇條の中拙者翻譯中にイキリス唐國合戰相止み次第五六十艘之軍艦を仕立日本を一時にせめ候樣子申出此儀公儀にも御心配之樣子且イキリスゑ存心は江戸に商館を立亞片烟草うり廣度樣子に御座候此をいやと申せはをいろふと申立候いつれ日本も合衆國之建中に相成候樣子相見候合衆國も極下官に相成候哉とあんしられ候外色々御座候

右如此御座候早々以上

和蘭人五月之船に持渡り候書物の中に下田應接之事を翻譯いたし候書物御座候色々日本之穴を申立候書物に御座候此節拙者和解いたし候

此度之使官

アメリカ人之和歌

天かけてかるほるにやと見し空（雲カ）の小春にかすむ武藏野の月

騎馬の乗方色々候へ共本は第一に馬の金くつ相用候
此節は諸大名方もかなくつを馬にはかせ候樣に相成候

二四　武家傳奏へ所司代より進達書　安政四年十一月

安政四丁巳年十一月武傳廣橋光成ゟ東坊城聰長ゟ自所司代相達
今般長崎表阿蘭陀通商御仕法替相成向後長崎幷箱館兩所におゐて交易
御差許有之魯西亞も同樣之振合に相成候右に付ゐは外條約相濟候國々
も追々右之御所置可相成旨被　仰出候右之趣被入　叡聞候樣年寄共ゟ
申越候事
十一月

二五　江戸より來翰の寫　安政四年十一月十九日

安政四巳十一月十九日江戸仕立書狀寫

一筆啓上仕候向寒之砌益御勇健被成御座奉賀候然は私儀去月十七日夜
無滯歸府仕候間乍憚御安意思召可被下候云々
一九月廿二日御地出立宇治泊翌日奈良泊夫ゟ郡山順路大和路夫々參詣見
物仕初瀨越伊賀路は安を越にて伊勢路へ出廿九日山田ゟ着晦日朔日無
滯參　宮二夕見等へ參り候へ共霜枯之時節故さひしく夫ゟ歸路四日市
ゟ乘舟仕風順宜半日計りにて宮へ着之處追々天氣都合宜道早敢取駿府
に至候ゐは淺間ゟ參詣久能山へも相廻り拜禮三保明神參詣松原を越海
邊ゟ船に乘り一里餘り之海上相渡り清見寺下ゟ着致し同寺ゟ上り庭坐
敷向も一見之處風景宜敷又三島宿へ至りては明神へ參詣致候處震災に
て皆潰れ取掛石居殘り居漸二王門殘り居候へ共是も今一風にゐ倒る計
に相成居申候誠に勿體なき事なから眼も當られぬ有樣にて門前には再
建之寄進札掛け並へ有之是は夥敷事に御座候去九日亞人同宿泊にゐ參
詣之處右之次第にゐ彼國之銀六枚可奉納之由（凡貳兩貳歩餘りに相成候由）

私儀も聊寄進いたし申候十三日箱根越湯本泊にて數日之草臥を退んと
數度溫泉へ入申候藤澤宿より江ノ島回り鎌倉泊り翌日は金澤泊り程ヶ谷
泊りにて歸府之積に付早朝出立仕候へ共短日故漸七ツ半比品川を越八
ツ山下に至り夫より船に乘り新出來之御臺場近く一見永代より汐合宜く御
厩河岸迄乘付け候處早初夜過と相成夫より歸宅仕候先々十分には無之候
得共七八分位は見物仕候積廿六日之道中一日ならては雨にも逢不申無
事に歸府難有事に御座候歸府後早速夫々御禮狀も差出度と心得候得共
數日之勞れに候哉何も手に付不申其上來人等日々有之一日〳〵と延日
仕御無沙汰に相成候段御仁免々々
一歸府後廿四日之夜四ツ半時隣町三間町續福内町より出火眞の風下たにて
火の子はら〳〵あひ不殘相片付大騷き仕候小半町きわ迄にて九半比鎮
火歸府早々驚かされ又々御地床しく相成申候
一亞人十四日江戸着（はや御承知に可有之書調所也）廿一日登城無滯相濟申候其前十八日比
に堀田殿へ參り申候又廿六日にも參候由歸候期も不相分長逗留之儀に
御座候とんた御工合にゐ日々之如く九段上三番町馬場にゐ晝後はせめ
馬いたし居申候よし
一國書和解も出來觸に相成候に付御地へ相廻り御入手之事と存候へ共寫
置候に付別紙御廻し申上候彌交易も相開け候事に相成時勢之變革無是
非御所置と被察候事に御座候
一御役人も兎角不穩相聞申候松平河内守（元御勘定奉行今御家老）岡田備後守（元吟味役今小普請奉行）
去十五日嚴命之由病氣に付御役御免之儀早々相願可申旨にゐ翌十六日
朝進達相成候由昨日龜有筋御成にて御免無之と相見大かた今日は御免
之上追ゐ御宅にゐ尻り出可申と專ら風聞夫に付同類右以下にも多人數
有之由にも相聞申候詰る處は福山君へ尻りの出そふな事に相聞一昨十
七日より遠藤但州御引き是も同物先は早々申上度如斯御座候恐惶謹言

十一月十九日

飯田左馬　様　　飯泉喜内

二六　米國使節へ大目付土岐丹波守上使手續　安政四年十月

巳十月十五日亞墨利加使節ゟ大目付土岐丹波守
上使御勤手續

大目附上使手續書

十五日御使者可罷出旨御書付御渡
一當日例刻平服にゟ登城御同朋頭を以罷出居候樣申上於新番所溜亞米利加使節到着に付御使可相勤旨備中守殿被仰渡之
一御品者御登城前於新部屋下通り見分仕置可申候
一被仰渡濟候ゟ御賄頭ゟ差添御徒目附ゟ御品御渡箱釣臺にゟ右之方へ持出直に平川口通蕃書調所旅宿へ持出開門にゟ玄關へ上げ差添御徒目付ゟ奉行支配組頭ゟ相渡組頭取扱上使之間上之方正面ゟ差置
一被仰渡相濟熨斗目麻上下着替唯今御使罷越候間案内可指遣旨當番御目附ゟ申遣御小人目付を以旅宿ゟ申達
一右按内之義幷御品ゟ附添之御徒目付且持人御門斷等之義者兼ゟ御目付へ申達可申候
一掛り役々者熨斗目麻上下着用旅宿へ罷越し右使節と面會相控罷在可申候
一平川口御門通退出雉子橋御門通蕃書調所旅宿ゟ罷越表門にゟ下乘敷出し迄草履
一玄關上に下田奉行支配向之内壹人罷出居上使之刀取之上使之間次之間に控居退散之節最初之處にて渡之
一掛り役之者玄關式臺ゟ出向着座罷在平伏上使罷通り跡ゟ罷越上使相勤候節者一同次之間へ列座退散之節先達罷在如最初式臺迄送り平伏

一支配向御目見以上者敷出しハ出迎御目見以下之分者白洲ハ罷出上使罷通り候節一同平伏支配向之分者一同前俊共此所に罷在

一下田奉行は式臺正面ハ出迎居先立案内致し使節は玄關迄鏡板正面ハ出迎居一揖致し且又下田奉行之譯に付先立致し上使之間敷居外にて兩人控居上使者上使之間ハ通り御品有之向も右之方へ御用掛り罷在ゟ下田奉行使節を召連罷出

通辯官通詞は出迎無之次之間邊に控居此時間内へ入都合見計可罷在候退散之節も次之間邊へ退居送りも無之

一此時上意申達

遠鏡使節として被相越太義に思召候到着に付御使を以御檜重一組被送之

一右之趣使節ハ向申述候得者通辯有之使節御品へ拜致し下り候此上使も少々下り候ゟ使節對立之時自分挨拶申述

初ゟ面會致し候彌御無異一段之事に候

右通辯有之使節ゟ相當之答申聞是又通辯相濟候時下田奉行使節御請可申上

十月十五日

亞墨利加使節ハ　　御使　土岐丹波守

御檜

右昨日到着に付被遣之

御檜重四重物　一組

内

紅白筋有平　千袋

（翁草）

吉野山落雁　三輪の里
紅あん

粕庭羅卷　春
求肥あめ

紅茶巾餅　黄菊まんちう

紅縁取蒲鉾　花くわゐ
鯛切身

玉子燒　すくひはす

あなこ　銀杏　午房
煎玉子抜　木くらけ

しやもなんばん煮　こんにやく

亞人獻上物

一銘酒　一壺
一鳥獸之繪本　二冊
一硝子火爐　一
一桃砂糖漬　一壺
一鰯　油漬　一壺
一望遠鏡　一

二七　所司代より傳奏へ進達書

安政四年十二月

從諸司代傳奏衆へ指出候書取

亞墨利加國より差越候書翰幷使節申立之趣不容易事柄に付厚く御勘考被爲　在交易之儀者　御聞屆有之ミニストル差置候頃合住居之場所右に付あ之規則等者猶及掛合候積且港之儀も下田を閉代港を開候儀御差許相成候場所之儀者猶談判之上取極候筈御治定相成候猶委細之儀者追

ゟ申越候へ共先此段不取敢被入　叡聞候樣御兩卿ゟ御達可申旨年寄共
ゟ申越候事

十二月十三日

去月廿一日亞墨利加使節登城御目見無滯相濟其節差出候書翰之和解一
冊幷使節之口上趣和解一冊被入　叡聞候樣御兩卿ゟ御達可申旨私在府
中年寄共申聞候尤御返答之義者御治定之上尙又可申述旨是又申聞候爲
御心得御達申候事

十一月

奉帋　亞墨利加國ゟ差上候書翰和解
表帋　亞墨利加使節拜禮之節口上之趣和解

同十二月御達

航海術御開相成候に付ゟは航海曆無之ゟは差支候處是迄年々和蘭より
御取寄相成候ゟ英吉利王府を以起算之地と相定編立候ものにて乘除之
手數相掛候而已ならす英曆を御用相成候ゟは如何に付御國においては
京都を起算之地と相定新規航海曆編立被　仰付候尤右は常例之頒曆と
は譯柄も違ひ候へ共新規之義に候間一應御達可申置旨年寄共ゟ申越候
事

十二月十三日

二八　外船措置に付武家傳奏披露　安政四年十二月

安政四　十二　十九武傳披露

外國御所置之儀に付ゟは追々申越候趣も有之候へ共今般亞墨利加使節
申立之趣不容易事柄も有之是迄追ゟ御所置之品委細之事情書狀にゟは
難相盡儀も可有御座と　叡慮之程深く御心配被遊今度亞墨利加使節申

立之趣御所置振を始追々之事情委細林大學頭御目付津田半三郎に被仰
含當地に被差登候間右之趣其筋に申入候樣次第何方へ成共私同道罷
出候歟又は私御役宅に御兩卿御招申候歟何れ成共都合宜場所にゐ大學
頭半三郎を委敷申上候樣被遊度猶御不審之儀者幾應も御尋有之事情能
々御分り相成候樣被遊度被思召候依之大學頭半三郎去る十一日御暇被
下早々罷登候間前以其筋に及示談都合宜樣取計候樣年寄共より申越候
事

十二月

二九　書翰寫　三通　安政四年十二月

或書翰之寫

此頃道路之說に江戸表は大騷きにて當十一日之御目付幷林家等上京右
者異船之事に付將軍家御書持參右之面々傳奏に直談との說に候へ共京
都公邊にゐは何之噂も無之候に付内々證文方懇意之仁に尋候得共來春
御目付津田半三郎殿林大學頭殿上京尤　御用之程は難計候へ共異船之
事にゐも可有之哉之見込と被申居候
一先月者先年より江戸公事に相成有之候上加茂貴船出入　公方樣御直聞有
之四代樣以來無之事との噂にゐ御座候先は右等大略申述度如是御座候
以上

臘月念四

同十二月廿七日　　林大學頭　　御目付津田半三郎

右者亞墨利加使節申立之趣御所置振を始追々事情委細被仰含今廿六日
致上京候間此段爲御心得申進候事

十二月廿七日

同十二月廿八日　殿下へ兩傳より

一林大學頭津田半三郎上京爲心得自所司代申越し候一昏入御覽候兩人行向于所司代役宅被申合條々可承申候哉日限來廿九日附武士召連行向度候事

亞墨利加使節被及應接候趣且右に付使節差出候書付和解追々申立之趣不容易事共に付厚く御勘考被爲在候處近來世界之形勢一變致し唐土之昔戰國之世七雄四方に立分れ候姿にゐ御當國に於ゐも已に外國と條約御取結御交通被爲在候上者古來之御制度に而已被爲泥候ゐは御國勢御挽回期無之日夜　御心を被爲惱候御儀に有之併非常之功者非常之時に無之ゐは難成中興之御大業を被爲立御國威御更張之機會も亦此時に有之候間御大變革被爲在度　思召候へ共當時御國內人心之居合方も有之人心不居合節者內外何樣之禍端を引出可申も難計候間先使節申立之趣追々應接之上可相成丈け被取縮め候筈には候へ共爲御心得御兩卿へ御達可申旨年寄共ゟ申越候事

十二月廿八日

十二月廿九日今日傳奏諸司代亭へ被行向林津田面會從大樹夷族之事言上之由也

安政五年戊午正月達之寫

外國御取扱方之儀に付　叡慮爲御伺備中守儀御使被　仰付近々上京之筈に候間其段御兩卿へ御達可申旨年寄共ゟ申越候事

正月

亞墨利加使節申立趣も有之一體之事情等委細入　叡聞候樣舊臘林大學頭

津田半三郎上京致し候處猶追々申立之義も有之外國御取扱方等御變革被爲在候付ゐは列侯諸藩に至る迄人心居合候樣被遊度付右御所置振等爲御伺　叡慮御使備中守被　仰付候間急速關東發足可致候處當年頭御使高家京着頃合二月七日八日比に無之候ゐは御差支も有之候由に候處右體御差急之御用柄にも有之候間其已前備中守上京致し候ゐも御差支有之間敷哉御兩卿ゐ否及御尋早々申越候樣にと年寄共ゐ申越候事

正月

三〇　二月二日已後の記事　四項

二月二日ゐ六日迄五ヶ日　仁孝帝御十三回聖忌懺法講

二月五日備中守京着旅宿（寺町本能寺）　即日兩役衆行向

同月十一日兩役又行向　同月十三日又行向

就老中上京

黃金鳳置物　一筥　尺餘之伽羅

判金　五拾枚（兩役一枚つゝ拜受之よし也）　一筥

以上獻金

太閤ゐ銀百枚

准后ゐ

綸子　判金　廿枚　殿下ゐ　銀　百枚

兩傳ゐ銀五十枚ッゝ　議卿ゐ

傳奏（廣橋東坊）　議奉久德萬坊裏

三一　關東へ可被申入御主意書　安政四年十二月

安政四年十二月　亞墨利加國より差越候書翰幷使節申立之趣不容易事柄に付厚く御勘考被爲在交易之儀は御聞屆有之ミニストル被差置候儀は御國人心之折合方をも勘辨致し被差置候頃合住居之場合右に付ゐ之規則等は猶被及掛合候積且港之儀も下田を閉代港を開候義御差許相成場所之義は猶談判之上被取極候筈御治定候猶委細之義は追ゐ被申越候得共先此段不取敢入　叡聞候樣兩人ゟ可被達老中方被申越候由被示聞則關白殿太閤殿へ申入達

叡聞候不容易之條々被惱　宸襟候前文ミニストル被差置候場所幷代港を被開候場所等之義は未た御治定も無之内之義故先被　仰進候當時之皇居古代とも御相違誠御手薄之御事に候得は甚御不安心　思召候畿内及皇都近國は被相除吳々不拘國體四民樣との

叡慮に候此段程能關東ゟ可被申入候事

十二月

三二　老中堀田備中守上使の件　安政五年正月

上使　堀田備中守

此度京都之御使被　仰付早速出立格別物入之段被　聞候別段以思召金五十兩拜借

一御手本ゟ別段金二千兩拜借

一金二十枚御羽織別段御差添へ御脇差御時服十鞍置馬於御座之間被下候事

御勘定奉行

川路左衞門尉

大目付

岩瀨肥後守

奥御祐筆

原彌十郎

一金二十枚時服三御羽織被下

一金五枚時服二御羽織被下

一同　斷

一金三枚時服三同　　大番格奥祐筆　立田錄助

一同二枚時服三同　　御勘定組頭　高橋平次

一同　斷　　組頭格御徒士目付　平山藤三郎

一同　斷　　御勘定下役　友之進

右京都へ之御暇被下拜領物被仰付候御祐筆部屋におゐて備中守被渡老中列座

三三　下田奉行井上信濃守達書

安政五　二　　安政五年二月

井上信濃守達書

亞墨利加使節病氣御尋之奉書御品之義明廿九日下田表ゟ打附宿次を以差立可申候右宿次到着以前若使節病死致候へは奉書御品とも通辨相渡格別御厚意之事に付本國へ差遣身寄之ものへ相渡候哉政府ゟ差出候其(共カ)取計方も可有之候間都合能候哉と申諭懇篤之御取扱有之候段彼國政府へも貫通致可取計旨中村出羽守へ能々申遣候樣可被致候事

三四　米國使節への書翰　安政五年

アメリカ使節へ之書翰

アメリカ合衆國全權

其許下田表ゟ到着以來病氣同篇之内殊に昨今別ゟ相勝不申由奉行ゟ急便を以申越候御配慮も可有之醫師伊藤貫齋差急其地に被遣候條治療十分に有之度依之爲御尋目錄之通被下候猶養生專要に候謹言

安政五年

目錄

一蒔繪提重　一組　松平伊賀守花押
一鷄卵但三百入　一筥　久世大和守同
以上　内藤紀伊守同
脇坂中務大輔同

三五　江戸より來書之寫　安政五年末
江戸表ゟ來書之寫

墨利加一件愈不容易形勢に相運ひ申候舊臘廿九日諸侯伯登城之命有之て墨利加所置振相談有之候處諸家議論少々つゝ異同候へ共皆々各別之正論も無之一同貿易風に靡き候由相見候水府公は川路左衞門尉殿岩瀨肥後守殿罷出し處御承知之通り老公之勇奮果決之御議論にゑ兩人とも一言も御答出來不申罷歸由一橋公御中人にゑ先々相止み候由承及候子細は官吏之頭を刎覺悟を極て必戰之御所置有之樣との御劇論にて有之候由併是は彼是申立候も御採用には相成不申樣に存候古來ゟ大器は用を難成と申も如此候哉殘念之次第に御座候其他之諸侯兩三家不心服之義も有之候樣承り跡は皆々夷狄之加勢致候樣之說而已にて恐入候扨始之風說にては京師之正論中之卓然たる事にて林家なと申上にては御評議にも不相成閣老相登り候て　奏聞不申ては容易御評議無之との事にて定ゑ天下之人心を奮發せしむる號令有之人心を振發せしむる樣に可相成哉と奉存此表有志之面々京師之　拔卓論にて關東之因循苟安之姿を一洗に致し候勢に奮躍仕居

申候處又々近日之説には京師にも格別之正論も無之多分關東之御所置之通りに相成候はゝ六ケ敷事にも相成不申幕府公方は諸侯伯貿易凡一致仕候處を堀田侯上京御奏聞にて人心を定異論無之樣致し候手段と相見へ候樣如何に致し候ても此度之上京不容易義にて天下之形勢に關係いたし候儀と奉存候不安心之義に存候何卒賢兄御地へ御滯寓之事故可相成は御忠慮御周旋にて其御表卓立之御議論に相成夷狄之姦計を摧き度何分ミニストルを京師に差置港を大坂堺等へ相開候義は決て不相成義と存候且勝手交易場所數ケ所相開候義不相成義と存候此等之義は隨分宜しき所置も可有之義と存候萬古卓立之神州今日に到て勢を摧き夷風に一變致し不遠内には兵亂と相成可申且又日本中も異變可有之只今變之無之内に拒絶被致候へは拒絶致度物に御座候此表政府之勢は全く西洋風に相成妖風に化せられ義を以斷する處は無之岩瀬殿なとは日本樣に御座候處此節は西洋偏好と相成候追々　神州之義氣衰廢仕愈以挽回之勢相見へ不申口先にては頻りに富國强兵を相唱候へ共約る處は商賣國に致候積りと相見候責ては有志之面々始終之見當を定斷然と異論邪説之大害を打消必死之力を極め國恩を報候樣に致度候賢兄は御自由之御身に候へは何卒十分を御盡し候樣にと奉存候

天下之形勢賢兄御前察之通り相成堀田侯廿一日立にて來月五日其地御着之旨宿割御座候夷人も堀田侯と同日に發足下田へ中歸り仕候何れ御地之云々相決次第又出府と被察候

中山忠能履歷資料第一
非賣品

昭和七年九月二十日印刷
昭和七年九月廿五日發行

不許複製

東京府豐多摩郡杉並町大字高圓寺四百十八番地
編輯者　大塚武松
市京市四谷區新堀江町三番地日本史籍協會代表者
發行者　早川良吉
東京市京橋區湊町三丁目八番地一
印刷者　高橋赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所　日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

64
267

終